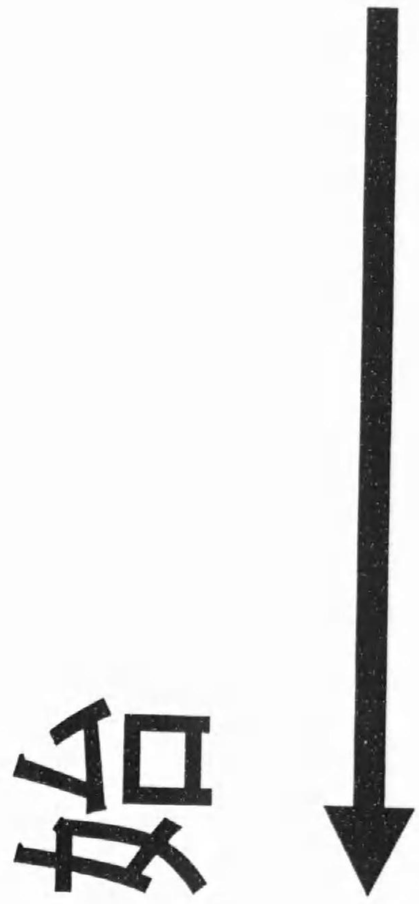

ロック

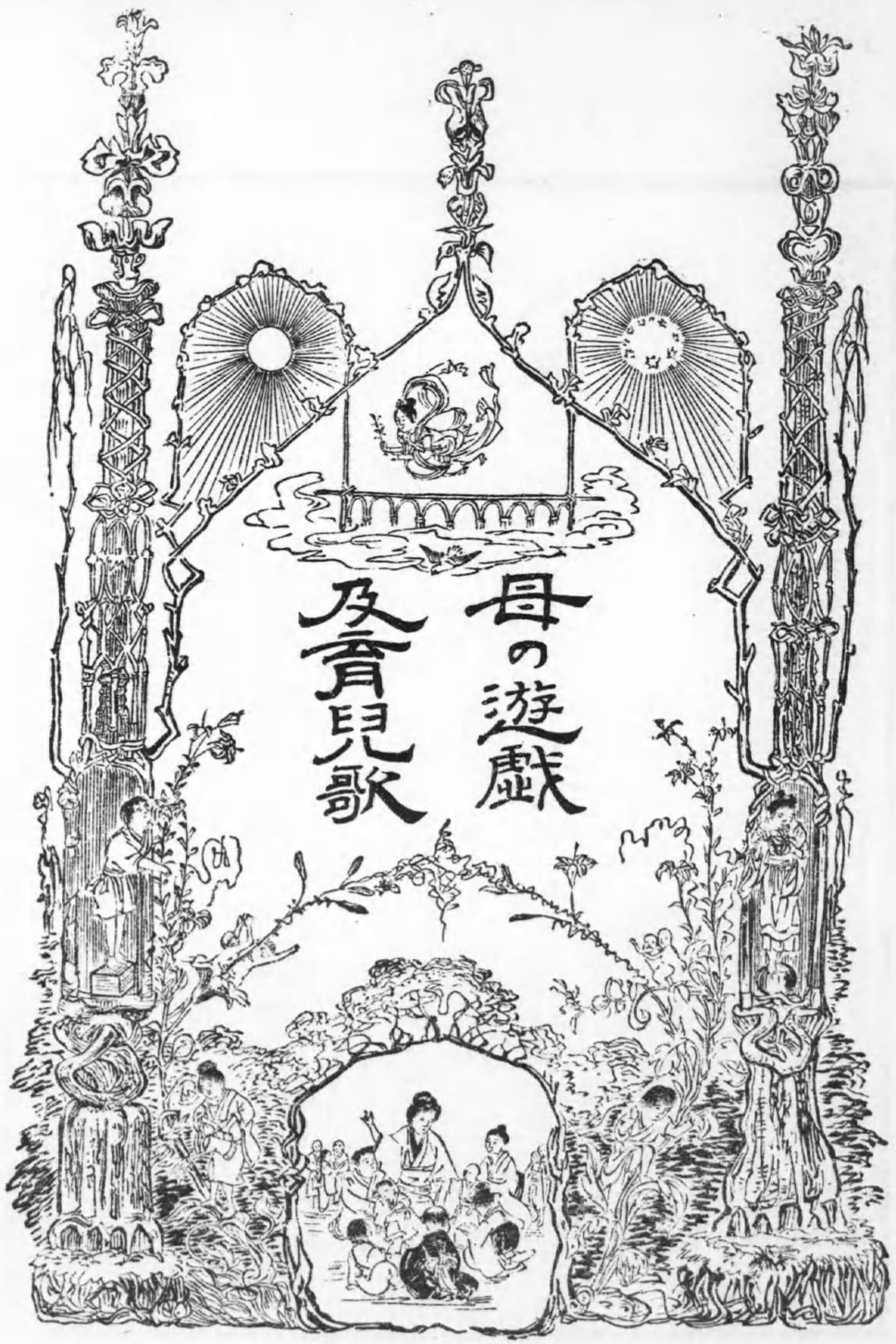
322
380

特220
500

母の遊戯及育児歌

獨逸フレーベル著

頌榮幼稚園出版


母の遊戯
及育兒歌

小兒の遊戯にも注々深意を含む

シルレル

天國に居る者は此の如き者ぞ

耶蘇基督

再版序

母の遊戯及育兒歌の初版は已に賣切れたれば茲に再版を發行して他日改訂完成の期迄其の要求を充さんとす

明治四十年三月

アンニー、エル、ハウ

第三版の序

一、この書の歴史

フレーベルは自ら教育に従事すること二十年の後、西暦一千八百四十三年に、この**「母の遊戯」**をかきました。即ちこの書は彼の圓熟せる思想と、最も充實せる教育上の經驗とを表示して居るのであります。

この書が、獨逸語から初めて英語に飜譯せられたのは、西暦一千八百七十八年で、この飜譯事業は米國に於て**ジヨセフイン、ジヤーヴイス嬢**の手で完成せられました。それから少し經て、二人の英國婦人即ち**ロード嬢**姉妹が英國に於てこの書の新らしい英譯を出しました。

西暦一千八百九十五年に、**ブロー嬢**は、曩に**ジヤーヴイス嬢**がなした様に、獨逸語の原書によつて新らしい飜譯を完成しました。併し**ブロー嬢**は原書の唱歌及び樂譜をそのまゝには直譯せず、其含まれ居る眞意を飜案して、新らしい唱歌と樂譜と

を添へましたのですが、この詩歌、音樂の飜案をなすには、最も優れた詩人及び作曲家の助力を得たのでありますその結果として、同**孃**は新らしき英譯によつて、原書に含まれて居る**フレーベル**の思想を遺憾なく傳へ得たばかりでなく、唱歌と樂譜の上にも、大に成功しましたので、幼稚園教師が、喜んでこの書を使用する樣になつたのであります。

不思議なことには、この書は日本と米國とに於て、同時に二種の飜譯が試みられました。即ち**ブロー孃**は米國に於てこの書の英譯に從事してゐられたのに、私はその事實を少しも知らないで、日本に於てこの書の日本譯に着手したのであります。

この書を日本語に譯するに當つて、私は原書の遊戲と說明とに含蓄されて居る思想を、出來るだけ精確に描き出す事につとめましたが、繪畫だけは日本の風俗・習慣に適合する樣に、その形態を變化しました。併し原書の繪畫に含まれて居る意義は、少しも失はれずに、そのまゝ日本風の繪畫の中に含ませておきました。この私の日本譯は西曆一千八百九十五年に、その初版が出て、同一千九百〇七年に、その再版

が出ました。而して此度の即ち西曆一千九百十六年のが、その第三版であります。

この「**母の遊戲**」を日本に於て使用し得られる樣に、適當に飜譯出版するに就ては、實に多大の時間・勞力・金錢を要したのであります。この事業を完成するために、始より終に至るまで、常に飜譯・繪畫・印刷などのことを監督し、この書をして世に出づるに至らしめて下さつた**坂田幸三郎氏**に對し、私は深く感謝の意を表します。又、飜譯に從事して下さつた**大和田・柏木・露無**の三氏、及び繪畫の飜案に力を盡して下さつた**濱・鈴木**の兩氏、其他この書の出版に就て色々と助力を與へて下さつた方々に對し、私は深く御禮を申上ます。

二、この書の性質

フレーベルは、最初この書を世の母親達のために書いたのであります。彼は世の母親達によく氣をつけて居て、その母親達が自分の子供等と遊んで居るのを研究し、その遊戲の裏面に潛在して居る敎育上の法則を發見しました。又彼は世の多く

の母親達は、子供等この遊戯の上に於て、人間固有の本能に、あまりに支配されて居ることに氣がつき、その本能を向上發展せしめて、理解力ある識見に到達せしめたいと思ひました。彼の考では、世の母親達が理解力ある識見を有して居ると、人間の内在的生命から外部に現はれて來る起居動作の意味が明白に了解せられ、隨つてその起居動作に適合する——即ち起居動作の奥に潜在して居る生命を滿足させる——必要物を、無意識的にではなく、自覺的に應用することが出來ると云ふのであります。世上一般の兒童遊戯は、理解力ある識見の産物ではなく、人間固有の本能に基いて出來たもので、これを應用して居る人々も、唯無意識に本能的に動いて居るのであります。

然るに**フレーベル**の「**母の遊戯**」は、理解力ある識見の結果でありますから、この書が理解力ある識見を有する人々によつて使用せられる曉には、兒童の世界には、實に新らしき日光がさしこんで、彼等の世界は光明を以て充たされるに至るのであります。この書に就いて**フレーベル**自身は次の様に申して居ます。

「さて、世の母たちよ。私が今、唱歌と遊戯とを集めたこのさゝやかなる册子を、皆様の前に捧げるに當つて、私がこの小册子を書いた動機なり希望なりを、簡短に申上げておきたいと思ひます。

すべて子供は、その極幼少な時代に於て、成長後に於ける生涯の萠芽を、チヤントもつて居るのでありますが、私はこの小册子によつて、皆様が子供の成長後に於ける生涯即ちすべての言行思想動作の萠芽を、その兒童時代に於て、明瞭に認識しなさる上に、幾分の手引を致したいのであります。

又、皆様が平生、無意識に云つたり、したりして居らつしやる特殊の言葉や動作の意味を說明し、皆様が兒童のために試みてゐらつしやることも、皆様の努力の生ずる源泉たる内部の衝動も、すべて皆様が御自分でハツキリと意識なさる様に御導き致したいのであります。この二つのことが、私のこの書を書いた目的であり且つ希望であります。

尚、御記憶を願ひたいのは、この書は、全く斬新な先例のない目的と精神とを以

て書いたもので、私はこれまで何人も未だ曾て探檢調査して居ない經驗の世界に新らしく一條の通路をきり開いて居るのであると云ふ事であります。それでありますから、この私の事業は必ず部分的で且つ不完全のものに相違ありますまいが、それにしても、これまで皆樣が心の中にはもち乍ら、まだ充分に會得してゐらつしやらなかつた眞理、即ち皆樣がしば〳〵誤つた仕方で解說してゐらつしやつた眞理——如何に慾目に見ても、不統一な無效果な形式と云はなければならぬ樣な形式で應用されて居た眞理——を、皆樣に明瞭に了解して戴きたいと云ふのが私の切なる希望であります。」

このフレーベル自身の言葉の如く、フレーベルがこの書をかいた主なる目的は、兒童研究用の教科書として、之を使用すると云ふのでありました。而してこの書は、實際、歐米諸國に於ても、日本に於ても、その目的に使用されて居ます。

フレーベルは唱歌と樂譜との上には、成功して居ません。それでこの書は兒童用

としてはあまり使用せられて居ませんでしたが、フロー嬢が、歌の言葉と樂譜とを改訂して、新らしい形で出版してから、兒童用としても、一般に使用される樣になりました。

私がこの日本譯を出版する目的も、之を直接に兒童用として有效ならしめるにあるのではありません。フレーベルの理想即ち兒童を敎育するには、必ず先づ、彼等を研究し、彼等を了解し、しかる上で、彼等を補導敎化しなければならぬと云ふ願望を成就させるにあるのであります。

この書に收められてある四十九篇の唱歌に含蓄されて居る意味を、參考のため、左に摘用しておきます。

一、手足の遊……兒童の成育發達の要素なる自己活動。
一、起臥の遊……失策に陷らざる樣に子供を勵ます母の務。
一、風　車……見へざる力即ち自然力の偉大なる事。
一、みなすんだ……かるはづみ即ち衝動に支配されざる熟慮。

一、味の歌……五感は私共の召使であつて、主人ではない事。
一、香の歌……感情の養成は智能啓發の階梯である事。
一、こゝろ、こゝろ……成功の基礎は時間を正確に守るにある事。
一、草刈の遊……相互に補佐扶助する事は秩序ある社會の第一要義である事。
一、雛を呼べ……親善友愛の喜び。
一、鳩を呼べ……言行一致の大切なる事。
一、魚……眞の自由は心から法則に服從することによつてのみ得らるゝ事、

一、的……私共の義務の認識の大切なる事。
一、菓子採……共同一致の大切なる事。
一、鳥巢……母の愛の認識の大切なる事。
一、花籠……愛は他のものを愛するによつて發達する事。
一、鳩小舍……事物を分類整理する事の大切なる事。

一、小さき拇指……事物に名をつけることの大切なる事。
一、指遊び……手の大切なる事。
一、祖母と母……家族生活の大切なる事。
一、小さき拇指一つ……物を數へることの大切なる事。
一、指ピアノ……人の一生に於て規律と調和の大切なる事。
一、兄弟姉妹……靈的生涯。
一、塔上の子供……進歩向上はその準備をして居るものゝみに出來る事。
一、幼兒と月……光の引力。
一、童と月……同　上。
一、少女と星……天地萬物を統一せる主宰者に對する子供の本能的知覺。
一、壁に映る影鳥……人の視感は外部的觀察より内部的省察に進む事。
一、兎……善は惡に對する最上の防禦物なる事。
一、狼……子供の純潔なる性質を保持する爲めの警戒。

一、猪……同　上。
一、小　窓……美に對する喜悦は内在的美なる事。
一、窓……靈的光の射入。
一、炭燒人……勞動の威嚴。
一、大　工……家庭の眞價。
一、橋……聯結の人生に大切なる事。
一、家禽小舍の塲門……注意監督は所有物の保存に必要なる事。
一、花園の門……同　上。
一、小植木屋……觀察の大切なる事。
一、車　匠……働くうちのたのしみ。
一、小木匠……外部の有樣のみが内的生命の表象でない事。
一、武夫と善兒……善を外部に裝はず、内的に善くあるべき事。
一、武夫と惡兒……惡の嫌ふべき力。

一、隱れよ我兒……母と子との心の一致の大切なる事。
一、迷　藏……身軀は離れて居ても、精神的には一致しておる事。
一、杜　鵑……分離中の一致。
一、玩具店と少女……物を選擇する上に於て、人の品性の現はれる事。
一、玩具店と兒童……同　上。
一、會堂の戸及窓……禮拜の美しさ。
一、小技術家……創造力の榮光。

三、この書は思慮深き教師のため

この「**母の遊戲**」には、貴重なる教育哲學が含まれて居ます。ある人の申しました如く「**フレーベル**は教育哲學者として、最も卓越した學者であります」**フレーベル**の學說はこの書の中に、繰返し〳〵記載してありますが、今その大要を分類して見ま

すと、

一、自己活動卽ち自發的活動が、人の成育に堅要なる事。
二、可知的世界より不可知的世界に進む事。
三、私共の生活には相互的關係の必要なる事。
四、模倣性は兒童教育上に於て、重要なる寶である事。
五、遊戲は子供の最初の學科である事。

などであります。この様な説は、**「母の遊戲」**中に於て、**フレーベル**の高調して居る主要部分と申しましても、畢竟これに外ならぬのであります。

今試みに之を例證して見ると、

「母の遊戲」は、單に教育書として重要なる價値を有するばかりでなく、これを社會的智的宗教的生涯の方面に應用しても、實に重味の著書であつて、その包含して居る眼界は、中々廣大なものであります。

一、社會的理想を醒覺し、發達せしむる方面に就ては、

△指に關する遊戲に於て、家族間の關係が高調されて居り、
△草刈の遊に於て、社會的獨立心が高調されて居り、
△菓子揉に於て、個人的義務が高調されて居り、
△武夫に關する遊戲に於て、社會的地位に對する希望が高調されて居り、
△炭燒人の遊に於て、勞動の神聖が高調されて居ります。

二、智的發達の方面に就ては、

△味と香の歌に於て、成長後の思想の營養物として、幼時に於て、感想印象を蓄積すべきことが高調してあり、
△家蓄小禽の塲の門及び花園の門の遊に於て、事物に名稱を與へる事は、科學的智識の初歩であると云ふ事が高調してあります。

三、宗教的教育の方面に就ては、

△魚の歌に於て、個人的自由は内在的法則に從ふ事によつて得られる事が

高調してあり、

△杜鵑の歌に於て、良心の醒覺が高調してあります。

△風車の歌に於て、不可知界の力即ち自然力の威力が高調してあります。

四、この書は教師のための實用的良書

第一に、この書に含まれて居る色々の遊戯は、高尚なる理想を、知らず〳〵の間に、子供に教へる上に於て、非常に價値あるものであります。

この「**母の遊戯**」を研究する上に於て、私共の深く心得て居なければならぬことは、教師の心がけ即ち見地は、兒童の正則圓滿なる發達の上に、緊要なる關係をもつて居るもの、換言すれば、教師の心がけは、兒童の發達の原動力であると云ふ事であります。

故に、若し教師たるものが、科學の中に、數學の中に、歴史の中に、人類の中に、人類相互の關係の中に、すべて天地萬物の中に、**神の、存在**を認得し、教育の最終目的は、子供

と神との間に敬虔なる關係を確立する事にあると信ずるならば、其教師こそ、**フレーベル**が教育者の目前に示した理想に達し得たものと申すべきであります。教師にして一旦この理想の地に到達した上は、たゞ智識を注入する事のみにつとめるか、世上の慾望にかられるとか、一身上の野心に苦しめられるとか、金錢を儲けることに奔走するとか云ふ樣な、そんな低級な所に安心立命する事は、もはや出來なくなるに相違ありません。

第二に、この書は教育上の最も重要なる方面即ち人格の陶冶を、如何にして完成するかを示して居るのであります。實際この「**母の遊戯**」は、この人格養成問題に關する一大論文でありますから、苟も進歩的主義の上に立つて居る教師は、他の多くの新らしき理想に向つて進むと共に、宜しくこの書を熟讀玩味すべきであります。

第三に、この書は、子供の肉體的及び精神的狀態を善良に訓練する方法を暗示して居るばかりでなく、この身心兩般の發達をはかる上に、最も實際的方法を指示して居るのであります。即ち身體のためには運動、精神のためには觀察力を訓練する

教訓などが、委しく示されて居るのであります。

この書の中に見ゆる感覺練習の方法・習慣養成の指圖・辨別力の發達に關する暗示・他の人々の爲めに働く奉仕的精神の養成・勞働を神聖視し之を愛する心の養成などは、**フレーベル**の廣汎なる實際的教育説中の僅一小部分たるにすぎません。

第四に、この驚嘆すべき書の中には、最も偉大なる宗教的信念中のあるものを發達せしむる方法が、明確に示されてあります。**フレーベル**は、世の母親達に、赤坊に向つて哲學の講義をしなさいと申すのでもなく、又、幼稚園教師に向つて、五つや六つの幼兒に就いて心理學の研究をしなさいと強制するのでもありません。たゞ彼の希望してやまざる所は、母たり教師たるものに、この書の中に含まれて居る大切なる眞理を認識して、自分達の監視・責任の中にある子供等の成長發達の上に、その眞理を自覺的に且つ充分理解力を以て應用して貰ひたいと云ふ一事であります。

この「**母の遊戯**」を頗る牽強附會な・迂遠な・難解な書物と見做して居る人が、すくなくはない樣でありますが、私自身の信ずる所を申しますと、世の中には教育に關する教科書が、實に數へ盡すことの出來ぬほど澤山ありますが、この「**母の遊戯**」ほど、靈感を以てかゝれた生氣ある著書は、二つとはないのであります。

終りに臨み、この第三版發行のために、熱心なる同情を以て助力して下さつた**井上秀天**氏に對し、深く感謝の意を表します。

大正五年九月（西曆一千九百十六年九月）

エ・イ・エル・ハウ

A. L. Howe.

第四版の序

大正五年九月發行になりました母の遊戯及育兒歌の第三版が賣切になつてから數年になりましてこの書を研究せんとする學生等は一方ならざる不便を感じて居ました。

ハウ先生御歸米前に第四版を發行せんと望まれましたが都合で實現は出來ませんでした。御氣にかけて居られた先生からは屢このことについて申越されました。やうやく茲に第四版を發行し得る都合となりましたことは喜ばしいことで御座います。

昭和四年十月

頌榮幼稚園保姆傳習所

母の遊戯及育兒歌上卷目錄

一序歌……二
一母の獨語……四
一手足の遊……十
一起臥の遊……十二
一風車又は風見の鳥……十四
一みなすんだ……十六
一味の歌……十八
一香の歌……十九
一こつこつ……二十
一草刈の遊……二十二
一雛を呼べ……二十四
一鳩を呼べ……二十六
一魚……二十八

一的……三十
一菓子揉……三十二
一鳥の巢……三十四
一花筐……三十六
一鴿小舍……三十八
一小さき拇指……四十
一指遊び……四十二
一祖母と母……四十四
一小さき拇指一つ……四十六
一指ビヤノ……四十八
一兄弟姉妹……五十
一塔上の子供……五十二
一幼兒と月……五十四
一童と月……五十六
一少女と星……五十八

一壁に映る影鳥……六十
一兎……六十二
一狼……六十四
一猪……六十六
一小窓……六十八
一窓……七十
一炭燒人……七十二
一大工……七十四
一橋……七十六
一家禽小舍の塲の門……七十八
一花園の門……八十
一小植木屋……八十二
一車匠……八十四
一小木匠……八十六
一武夫と善兒……八十八

育兒歌及圖解

上卷目錄　畢

一武夫と惡兒……九十
一隱れよ我兒……九十二
一迷藏……九十四
一杜鵑……九十六
一玩具店と少女……九十八
一玩具店と童兒……百
一會堂の戸及窓……百二
一小技術家……百四
一結尾の歌……百七

序歌

母と子

なつかしのいらかの我児や
かくやきわくる其容
春のはじめの空なりて
清き心の信仰よ
任める心の信仰よ
身をおく母のふところふ
きざしそめつゝ動きつゝ
来れ子どもよ打つれて
光のうちふくずまん
母の光はあけくれふ
愛と望と信仰と
かゝる恵とのろこびを
智識の光やはらかふ
照す光は何ものぞ

母と乳児

なつかしのいらかの我児や
かくやきわくる其容
笑ふひろりは何ものぞ」
清き心の親愛よ
身をおく母のふところふ
光をかゝへまんのいよ
母が生命のめぐまれて
共に見がほし我そばふ
児のひろりいよるひるふ
のそみてやまず児の身ふ
海がめ道をみちびきて
心ふふく知らせたく
王位をあめて二つなく
笑の眼ふなつかしれて
かぎやく望よ汝がむねふ
かゞやく望の其のげよ
のげのたらしき春の日の
もとめてやまず世の中ふ
かくて天なるたまーひふ
高き慶ふ去るべせん

母の獨語

○初生兒を見たる母の情

オ、神よわれの
我を撰びて妻とふし
生涯を得させ玉ひけり
いと大なるたまものを
天津使のそれ似たる
オ、わが夫よこのたびは
まことの愛のまことそ
眞へに神に謝し給へ
我等二人をとしふる
苦痛を受けて生れし
今は安けくなりぬ母の
最も尊きよろこびの
その喜ひ又添ひて
我ふ贈らせ玉ひけり
きよらけし兒を玉りぬ
父となりたる我夫よ
いとまくしき賜物そ
初ふ見ゆる物も皆
一つふつたなく鎖ふり

獨語

膝ふ眠れやわの兒よ
我等兩親つき添ひて
我等が生命の再興者
比べて愛つべき我兒よ
オ、神よ我父よ
あはれ我ふのはて迄も
人も皆是き神のそ
我等親ふの者にして
神のまゝ樂園よ
尽きざる生命の源よ
清く過ごさせ給へし
オ、我神よ乳そくべ
一つのおとふ結ばれて
住まゐ玉へもとふ
うき世の浪ふくとふ
安けくは身を守るべし
安ふまくしき冠ふも
○乳兒をつらく視たる母の喜悦
罪ふきちごともわれ
遊べる母の歓悦そ

誰の心語ふべき
世の幸福い唯これそ
母がおわひ我ちごそ
何の願も又あらじ
我ちごよ〳〵
さても汝身そ何故ふ
語ふ聽せよ其故を
なくは身ふぶふ
泉の如く溢れきぬ
置く能ふざらを
まが子ぼりの美くさ
霜の如くり粧清き
雲ふ渡れる春の日も
ゆたけき心の歓悦て
ちのみごの接吻ふめさめ〳〵母親の
それよろまびい限ふらずも
愛の光ふ照さろく
優しきもの為ふ情よ
幸ひのとかと祈る外
かゝるとに安く見ゆる
曜きのとちつ贈づきつ
母ふ新しき歓悦も
愛らしき其頭
花の蕾のそれしも
罪もはげれゆまがらぬ
ひとひの際の氣高さよ
匂へる花のそれならで
唯みちて尽きもせぬ
母の歓悦を
今我世界い昨日より
夏の昼井ふ燦出てし
晴れ渡りたる大空ふ
光のぬく輝きて
眼の外ふそ溢れ出る
我とは身をいや深く
あゝれ滅ふ我ちごよ
地上の天使の心地して
遂ふ来らん世の力
力の基ほの見えて
包まれそめて萌え出し
楢れ種も萌出でぬ
日ふけふ強く生ひ立て
栄ゆるまゝぶ見ふけ
もといふ深のらん
まさりてまさりて
尽きも曜の日の

きらきら光を迎へなり　愛兒のせし事ども
我身は要ふもいとまよく　いとよき女となりぬけり
ちごを養ひ育つるは　よろき恵をも悦びぞ
心の限りのよろこびぞ

○稚ごと遊ぶ母

母親が

つくづく我子うち見まもれば
又うるはしき紅悦を
元ちごをとゞめ悟り
幸福をとゞめ護らん
オちごよ美しのまよ
深き知れぬ海底に
おさなくそきよく輝けり
身ふたつをふまぐべき
小さき頭のつれなバ

又深く深き真なる
赤ひつもも清恵の
其一生の最大の
汝かなめ捧ぐる我愛ハ
光かくせる真珠も
我いのふる祝福もて
いと愛やき我ちごよ
母が手をもとさへなん

ちごの額とその眼も
誇とやもて充ちたり
薔薇の如き頬ありて
そゝやゝねてゝ眠る寄
耳ハ聞ふとく音樂の
こゝろよふ小さき鼻有て
真実の外ハ何事も
赤き珊瑚の唇ハ似ず
我ふ向ひて密接ふ
紅色のまろき題
ふくぼをつくる頬を
もぐれて殊ふあむあり
倫へ頬ハ黄金の
雪なす頸ハとまる
なゝしきもあゝしや
保ゝむるハ八個候よ

母が心をよろこびと
さくに紅白とまぜ
静ふ母の肩よりを
又しばふさゝれ微妙なる
音ふ傾けときくふん
又口もありしかロは
語らさゝれとぞ願ふる
此唇ハ何けくれふ
文字事なやおりほくゑむ毎しやはき
母ふまべての物よりも
露ふぬれん愛嬌を
髪もて妙ふ掩れつ
あゝれしき母ふかぐばりちごの頸をまもぐふ
ゆたかふ肥えそうくしく

おもゞ接吻せられけるやゝそ成人せし時ふ
遊びのためそ作れ
愛よい日々ふそれゝの
又是そそい美しき
母ふ抱れて暖のふ
まそれ張ゝし胸そか
健康ふこそおぼゝえ
胸の井ふや麒ふらん
輝きわたる夏の日の
をさなき眼の其みの
かくてそは命の源ゞ
ひそむといふを覚ゝ
こゝふ二つの脛ありて
幾月日をか重ぬらん
唯一筋の善道ふ

又の背い我ちごが
力を與へん頼もしさ
これ手にて是指
使ひ方をも学ばらん
我幼兒の細腕よ
心地ゝさゝゞ感ゞらん
《我兒其身を最上の
罪なき心い静ふし
悲哀も苦労も襲ふよ
空の如くふ或い又
最初の眼の如くつゝ
乳児の心の其中ふ
怒を弄ひ侵をふよ
獨ゝで歩み得るとハ
肥そ梶もなゝ足ハ
乳児ゝびくを願ふり

又脚目と両膝も
徒ゝそうをを幸我得》
二列よありて十個あり
愛よの身体ふ綺ぬ
ものゝおぼゆる時未ふハ
他の子供と交ゝて
今もや心ふ其顔
我そ無言の其邪ふ

水の外をも思ふま
ゐたゞ兒の其趾も
さて今我は悪く
やゝそ乳児せとて
我をところを恥ゞん
心の糧を見出ゞさん
前ゝ初ふそ我しる
是そ養ひ育つれ

○乳児の發育を衛る母

日々ふせひ三つ我乳兒を
母ゝ祈ゝて言へるやう
浪風あらきこゝろ世ふ
きれども母の役ゝして
天父の胸ふ来ながく
来ゝて見ゑ我乳兒を

儘ゝふうらも大神ふ
「我兒をほれぬ身ゝふして
無事にとゝれ大神よ」
おのれも力をつくまゝゝ
休まん願あるふらバ。
朝日ふ匂ふ初花も

遊の足手

母への言、

をさなごの
父よ母よと
たごはたらうす
空氣の中ゐ
心ゐいだく
もらゝ初めたる
母とのねそびい
こほこれ天の
きづけ給ひゝ
耳目ゐふるく
心のそ大ふ
その生命を
ゝゝこき捨ふ
ひそめる感覺
未來のかげを

まだいへず
手と足を
おきながら
おもひをば
あゝたより
はじまりぬ
母親ふ
暗路よ
ものおとは
ゝくれたる
さまゝゝて
たいむれふ
ひきおこゝ
もたらゝぬ

歌、

つまづきころび いくたびの
小さき手足ハ はねまハる
かくて生命と 力とを
身ゐ得しちごハ いつゝのも
胡麻油のたねと 生ひいでゝ
とゝしびとゝりて かゞやゝん
朝のなさけも 夜なゝふ
我子の上ふ もえそひて

遊の足手

母への言

たらちねの
母ごのきづくる
あそびの手まも
思ひをいだき
それたいむれふも
望をおこのと
かくてそそだち
やごのて来らん
なべての悪ふ
能と智恵とを
慈愛はそおき
そばふ遊ぞど
危難も其身を
いさゝかの
いやふこのき
起臥のの
いや高き
よをそるなを
ゆくちごハ
老の功の
勝ちぬべき
得るぞこの
母親の
いつとても
侵をまじ、

歌、

子供はうしろふ
母ふよばれて
よろこびたのしむ
心もやもき
愛する母の
害をるものく
今は後ふ
母ふよばれて
身とあましひよ
力は母の
愛ふぞ常ふ
倒をたり
又起きぬ
その笑
そのわらひ
呼ぶときは
なゝと知る
たほれたり
又おきぬ
このくれるる
かぎりふき
ひらかるゝ、

風車 又は風見の烏

扨へ、物真似はじむるをきなごの
いとさくやかなる奮勵を
少しも怠しめさげしむな
同じき事なくりのへし
又繰り返へす其たびふ
樂みたえず増るらん
更ふ物事ためをてふ
心もおきんとさしへふ、

歌、

空高く
見つのぐる塔の風車
風吹く毎ふくるくるとまはるが如くをさなごも
可愛き其ようをいくたびの
まはしながらも美くしき
遊びを教を得るぞのし

みなをんだ

をきなごは
空なる皿と
つくづく見て
たべつくしぬと
されども母ハ
うせーと見るる
まことふうせず
かへたることを
このをきなごハ
たやすく心
小鳥ハ我巣
ぬむ野原ふ
空ふ失せーま
かまふうせーと
ほのかたちふ
あらされむ、

のきたつぷ
皆をべて
知りふけを
よ向ひ
食物も

歌、

をほりたを
今やわの児も
夕食はいまや
わが児の腹も
口もたべくる
舌ハふめたる
たべたるものも
まぐりくだれば
今は遊ふ
身体ハ強く
その頬も
櫻の如く
又其顔の
雪の色ふも

をほりたを
をはをくり
みたされぬ
ことを知り
事を去る
小咽喉より
我ま供
餘念なく
あのくふり
白きふと
まさりけを

皆をんだ

味の歌

母へ、

天の五官の窓より幻界を
教訓の光を與へけり
五官の窓より霊魂の
尊き心を天地の
げるも五官ハ霊魂の
其をきおこの綱なるき
清き印象のみ留めませよ
世の苦も憂き事も
きらバ生命のつるぎり
七星の光かがやかん、

歌

をさなごよ
いざ其口を開くべし
こゝに熟せし果もあり

なづねもとめなをまふく
母ハ光をみちびかん
扉をあけてをさな子の
やどみのまこにそゝげり
まどろめあれバ人母よ
心のまどふ気をつけて
きらバ生命のつるかぎり
おそれぬ人となるぞかし
世の樂を身に添へて

いまよき物を味ハせん
この一ツ多きあぢのみ

歌の香

○香ハ歌、母へ、

世の中ふ
生きとしいけるものハ皆
かくれて外ふ見えねよ

味の歌

長き短き一生の
にごしと思ふ事もつん
ふがきの乳ぶさとのまく
をさなごよ
熟せぬ果を食ふまれ
くだものこそハ上の皮
若し汝これ食ハば
なやみの車や出して
されぞ子供よ父母よ
いのち力をいたづらよ
のならぜ不熟の実を
食ふな、

我身の上ふハ時として
きれ心ふ生命あれバ
あるとき果とおもふべし、
あるハ少くみのらざる
中のおんまそみふたる
いたみの為みつきぐふ
ほろびの谷ふまろびふ
熟せー実ふなせよし
ついやさいと益もなし

歌の香

生命の力そたもちつ
をきふきちつのいちはやく
根のばら辺ふ育ふ花
花ふいのちのたねぶそ

いよくそだつとわりハ
知りて覺んとぞ
その色、形、香まそ
かうろふくき投けれ、

歌

わがをきふこゝすきぐの
其香をべのぎよけり
アをきふこよし花の
ムをしき香を神そハ
眼ふ見えねど其のほり
かうる妙ふる香をおきて
作をまひー大神ふ
あふぎー花の香や、

花の小枝をま折て
アよきかほりよきかほり、
香いつまより来ましぞ
花びらの中へねきまふ
四方ふみちつ溢るふり
このく美ーきしもを
感謝きげん美ーや

さいはいみ

一生涯を送らんと　心に望む人々は
物事順序ほどなひて　なきねがふ幸福の
運命得んとおもふ人　規則どおりたる時を守り
矢よりも早き時間たべ　乱さずつとめよ
労慣のなき人は　多くの損失はん
をきふき附ろ子供ぶ　守る時間の其値
よく教へなば人となり　たえず味ひ思ふべし
時の寶のたまものを

歌、

ゆきつもどつさりの音を　いとも恐つふひびけども
時を少しも違へぬふ　ぬこちのちこち絶間ふく
ひとうちひとうち動きつて　つとめ〳〵と前ふゆき
後ふのへりし又前ふ　寝起をる時遊ぶ時
谷をる時食ふ時　手き時刻を晝と夜
夜とおく告げきまゝの　心づひを省くあり、
時計の手くうつ音も　我心をバ新ふー
みさわやふ強くなす　ひとうちひとうち動きつて
ぬこちのちこち絶間ふく　後ふのへりし又前ふ
つとめ〳〵と前ふゆき　つとめ〳〵と
ひとうちひとうち動きつて　つとめ〳〵と

草刈の遊

世の中の
凡てのものふ一ツ一ツ
ふとの存在る真理をバ
幼な心ふよびおよー
其ふとわをを
教ふる事ぞ
かなめふる
昱なかりせど
汝がほねをりも
効を見ぞ
高き真理ふ
をきふごを
進ぬーめんも
いとのたー
草刈遊を
幼児ふ
教ふる母も
真理の
端緒をはや
扱くなり、

清造よ歌

牧場ふそげ清造よ
こゝろ樂き事ふ
味深き牛の乳
牝牛小舎ふさまよぬ
肥えてやさしき牝牛
ちゝと「パン」とふ幼児の
世の人々がろ〳〵のの
たもつ情ふ謝せよと、
栄えつゝある草をうれ
清造どのよりやさし
小舎牛にも謝するぞよ
おもどのふも禮申ん
我母とうも禮申ん
神ふ事を忘るふよ、

栄えつゝある草ぶれ
飼草を家ふ運び来て
喫ふる牝牛ふ養へよ
たのもはぜして乳ほれ
雪より白き其乳汁
身体を養ふものぞと
まこと試つて我いのち
牧場ふそげ清造よ
まれおり樂しきふふ
草かるまと試禮申を
乳をあぼりし宿の下婢
冬籠をまねて「パン」をゝく
かく情ある人々ふ

雛を呼べ

おどもらが
ちいさき手ふて
さしまねくより
遊ハ外ふなりけり
我をきなごハ
垣根ふあそぶ
むれのひとりと
なりつゝも
とゝもふごきて
かくれたる
いのちのさまを
目の前ふ
見ることを喜ふ
うれしけれ、

歌

来れよひよこ　おゝふ来て
あそべやひとつ　又ひとつ
来れよ来れ　皆来れ
いざ〳〵遊べ　こゝふ来て

鶏を呼べ

鳩を呼べ

嘉悦のかゞやきわたる胸のおもひの光線も
子供の顔を打守る母の眼ぶこそ楽しさも
心をこめて浮ぶなれ母の心はたゆみなき
雲のうげさへ遊のなるとむふる、

歌

ア、我愛よ　をきふごよ
鳩ぢのそふたふ　逢はんとて
おふたふ来るよ　いざや子よ
鳩呼びとめて　いへよかゝ〳〵
「親」しき鳩よ　御無事なり」と

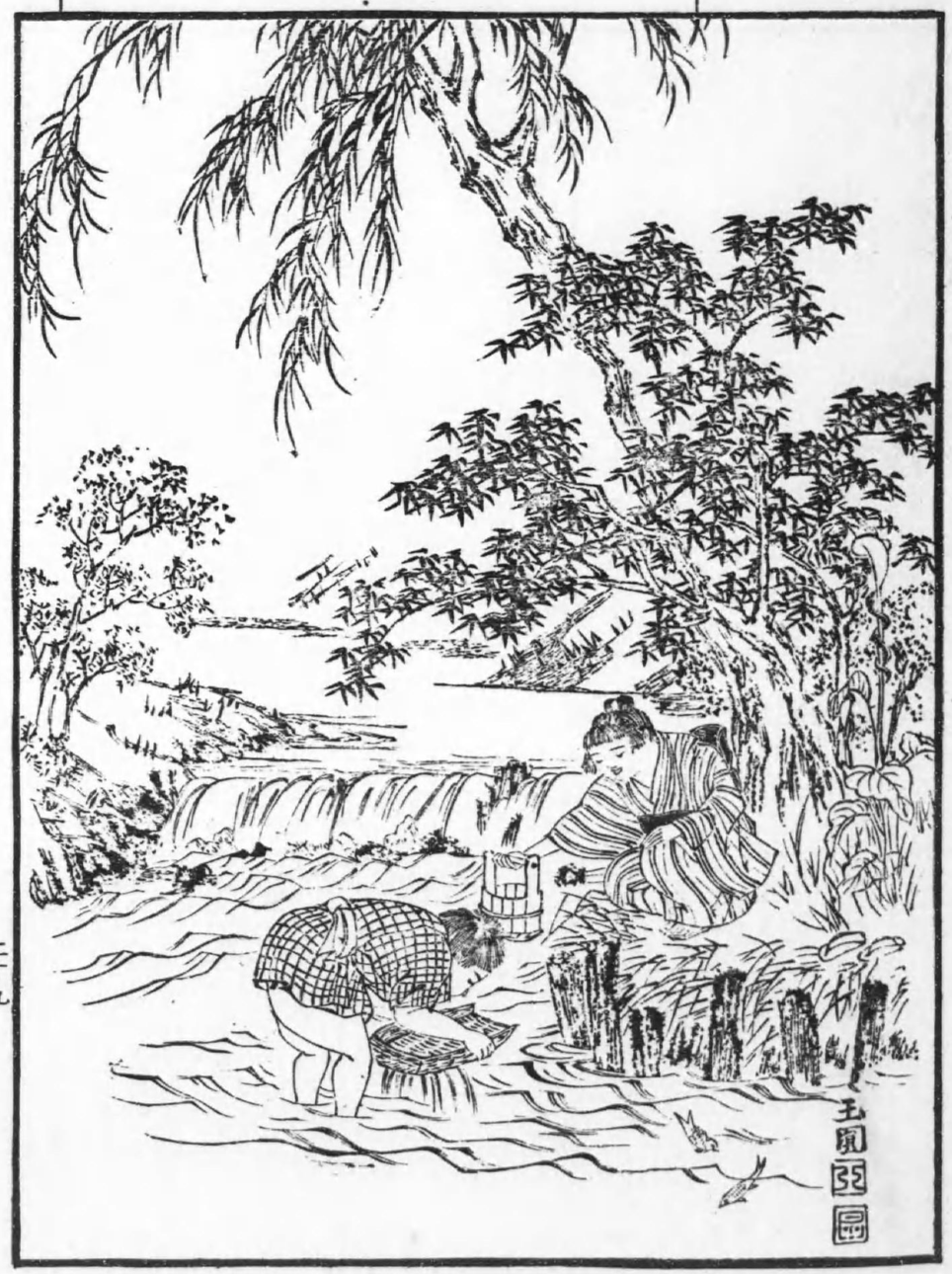
鳩を呼べ

魚

活きたる生命あるところ
いづく如何なる
子等ハ勇みて
清く輝く
いつゝけがれぬ
其楽やさとるらん
かく〳〵て遂ふ
擇む心の
母の善悦
たとへんものも
おろかるべし〳〵

水清き
山下ゝげの
かげやく魚ハ
岩根の水ふ
深びあつまり
ふるゝと思へバ
くの字ふ折れて

魚



的

此様遊び
深き心のなきごとく
庸の日々ふ併けゆく
目より窺ひ見る時ハ
知らぬ心おもあり、
あるハ異ふるさまぐの
作るが如く或ハ又
完き一つとある如し、
我儘きわまる勤めや
まく備かりし所うハ
凡て虚栄と完全の
胸を蛙しきまも悦ふ
凡ての事が集まりて
つくづく見れバをかふハ
きれバ小さき柱ふも
貫ぬく真理ふもるあり

見ゆれど若き霊魂の
其有様を知る人の
夢ふもまだ人々の
此日足れ粗き石の如く
色集りて白色を
多くの物の集りて
そも働と成功も
物ふ順序と均合の
子供真実をさとる迄
備ふる見れバをきふ子
をどり廻ふ人世の此
一つの業を仕遂ぐ
業ふてそ完さるれ、
至大至高の天地ふ
汝ら道理のとぶかざる

所ふまでも標符ふ
おのづからと悟をり
実物をもて教へバ
千度百度くり返し
一の完全物をふすお
活きなる教とあぐれ。
真実堅固の性質を

歌

今我ハ
この木の行を縦に置き
二つを重ねて孔をあけ
この板をさふおく
的の價をいくばくぞ
木のきれ二つが金一銭
仕事ハ皆が金一銭
この的一つも持たれぬぞ、

もとよりなそ教ふの
心の底ふ見せーむる
あらと心ふ刻まれん、
詞重ねる夫よりも
深く心を感ぜーめ
ふーく完き行も
やがて作ら疑はど。

まく千文字ふ横おき
本釘ふ中にうちふみて
的とそ一つ出来ふ
これ二つで金こ銭
小さき板ふ金一銭
金を拵もぬ人々は

的

誰も皆
一つの工夫を　なす時も
共ふ助けて　はたらべし
いろふ小さき　事ふても
おのゝ〳〵おのゝ
力つくして　はたらべし
さらばごとく　時の間ふ
出来て互ふ　たのしまん、

歌、

をさなごの
自ら作りて　仕上げたる
ひらなき菓子　ふ〳〵ふあり
いとふめらのふ　出来よけり
菓子やく人ハ　云ひけらく
小さき菓子を　持ち来れ
かまのひえざる　そのさきふ
いざその小菓子　焼きて見ん」
「菓子やきどのよ　此菓子を
我子ふやきて　給へ」ふ
かまの小菓子は　忽ち
味ひうまく　やけふけり
待間あらせず　焼けふけり、

鳥の巣

鳥の巣

をさなごは
生命あるものを　なでめつて
好めるものふ　ふ時も
唯たのしさまぞ　見たさるし、
おのが心の　想像を
動かを像い　何ふても
俤むかひ　思ひ浮べて
かくて生命ある　ものゝうち
殊更愛づる　そのものゝ
像をとらと　覺ゆあり、

歌、

山里の　生垣ふ
しづけき宿の　小鳥は今ぞ　巣をつくり
そこふニツの　卵をば
いとやそらふ　生みおきぬ
ニツのひよハ　いつしのと
さけびそあけり　ピーピーピー
親をよびつゝ　ピーピーピー
愛する母を　ピーピーピー
さくふほびて　ピーピーピー

花籠

花籠

をさな子の
愛する花を
飾りよそはせ
休ます勿れ
花の數々
つみあつめ
忘れぬされふ
のくばかり
花愛でてふ
頭味はせーめと
つゝむべしー、

歌、

其小かご
さゝ持ち来よ
いざさゝ
いとねんごろしく
うつくしき
色もてそれを
我父上の
誕生日
今日ぞ其日ぞ
あゝうれたれ
此よき歌を
うたひつゝ
此花かごを
父上ふ
たづさへもんラーラーラー
色の香の
うつくしさ
ラーラーラーラー
いざや祝ぎむ
我父を
ラーラーラーラー

鴿小舎

鳩小舎

そもさなごは
己が心ふる悦を
遊びとおしてのら居を
鴿が其巣を飛去りぬ
多ふれどうちつれて
子も亦楽しき我宿を
長く楽ーき日一日
てのらのう遊の外ふ又
愛る宿ふ帰り来て
母ふ告ぐるを上ふき
かくて九てのまち悦ハ
たとえをめぐりてる匹、

集ふるものハ何ぶても
常ふ楽ーみ好むより、
子供も野原に来る氏
鴿我巣ふのるより
それと眺めて帰りくる
出ひる種々のまち活と
見もし聞もせー事ハ
幾度とふく繰返し
楽ーとおそ思ふれ
花環の如ーつぎぐふ

歌、

我ハ今
我鴿小舎を
外ふといへむ
野原をさして
あくてたのーく
すごーて夕ふ
ふたゝび帰る
かゝくごぞして
やをきねむりを
たのーきひるの

開きつゝ
鴿はみふ
飛び去りぬ
日をー
ちりぬれで
はとの小舎
又おゝふ
興へけ里
夢も見よ、

小き き拇指

をきなごふ
一つ〳〵の指の名と
また其指の開ひ方
いざや教へよ
のくてあそこの
これより得ると
知れよのー、

歌、

此指の名ハ何といふ
もも十如くまるく見ゆ、
これひとさし指ふして
景色按子を役目あり
これ最も長くして
中指とおそろしけれ
指環をはめる指なれハ
此指の名ハ何といふ
小指といふ名を得たり
各異なるはたらきを
一の心のいふまゝふ

これ小さき親指で
此指の名ハ何といふ
野山の花や遠近の
さて此指ハ何といふ
そなたにあるなれハ
まゝ此指ハ何といふ
ゆびわ指とも名付り
一番小さき指なれハ
五の指ハのうみて
あせども固く結びあひ
おの〳〵務をはたさり、

此小き拇指

指遊び

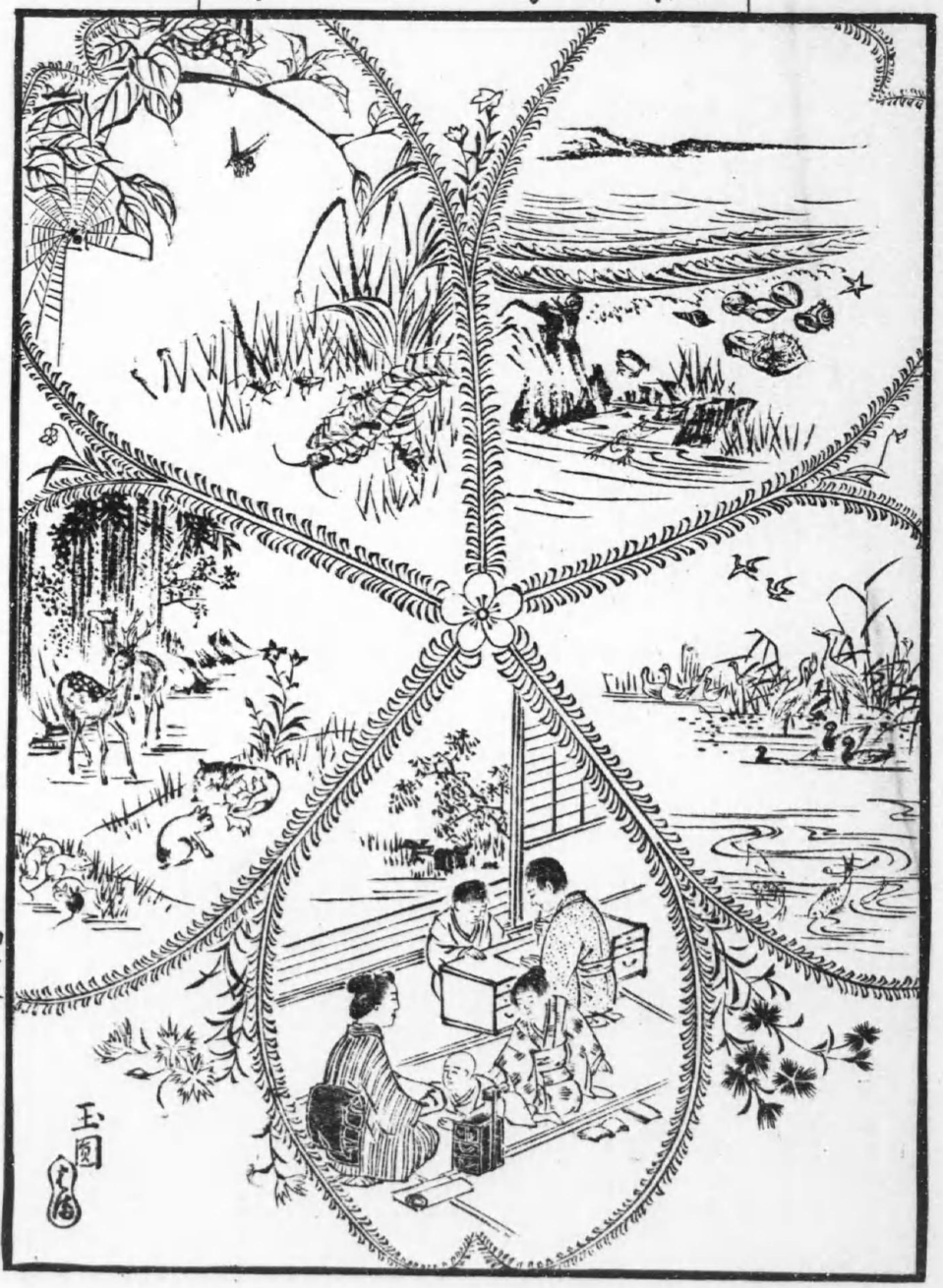
玉園

指遊び

をさなごは
おさき指を動かして
指の遊び
かくて遂ふ
指の力も指つかふ
心の力もいやまさむ、

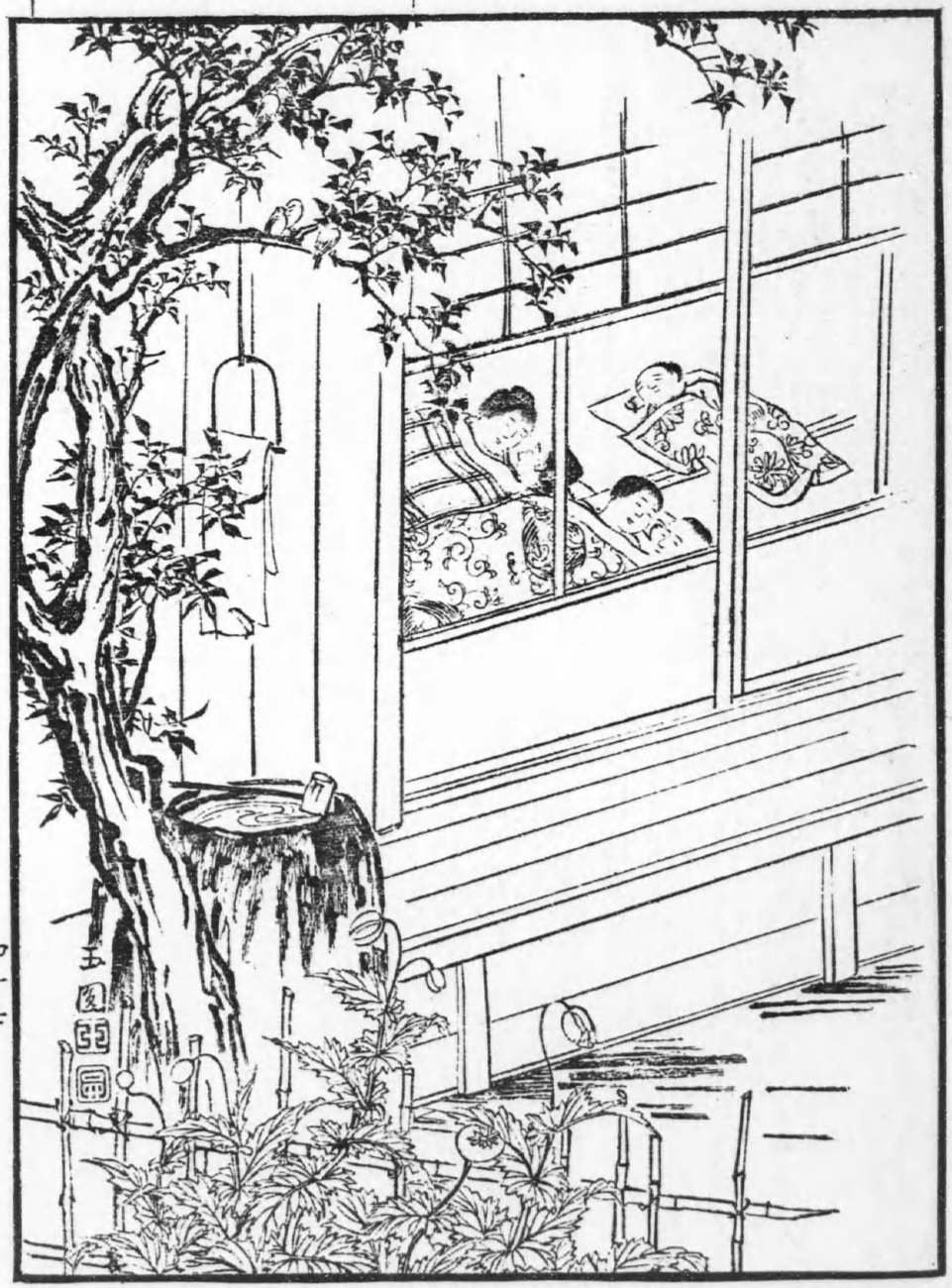
歌、
あの手を前にふり出せ
拇指と他の指を折りまげて
みふ〳〵ともふ
をはやうといひふごのら
拇指と小指とに
なこの指とひときー指
指わゆびもろともふ
をはやうといひふごのら
みふまへふかゞめつゝ
禮義よく美くしく
おーきさせよ我指ふ
よろこびつねよ
おゞぎみぞともなふ、

をさふごは
生れ落てより
ほどもふく
小さき部分ハ
一ツなる
全きものふ
和すといふ
事をふーく
さとるふり
老も若きも
一つ家族
同じ一間ふ
集ふ時
ちごふそれ〳〵
教ふべし、



されこそはおぞあきん
これおそはおぢいきん
これはてさま
おせいすべき
家族はべて
こは善良の
是も歡びの
されハ脊高き
これを人形を
こは皆揉の
大人と子供
よき家庭をバ
日々ふつとめよ
其報悦の
あふるまでふ

これかくさま
母の子ぞ
此ふあり」
母ふーて
満ちーて父
兄揉
すく姉揉
愛する坊
とりまぜー
見よや人
もてらけよ
盃の
こぼるまでふ

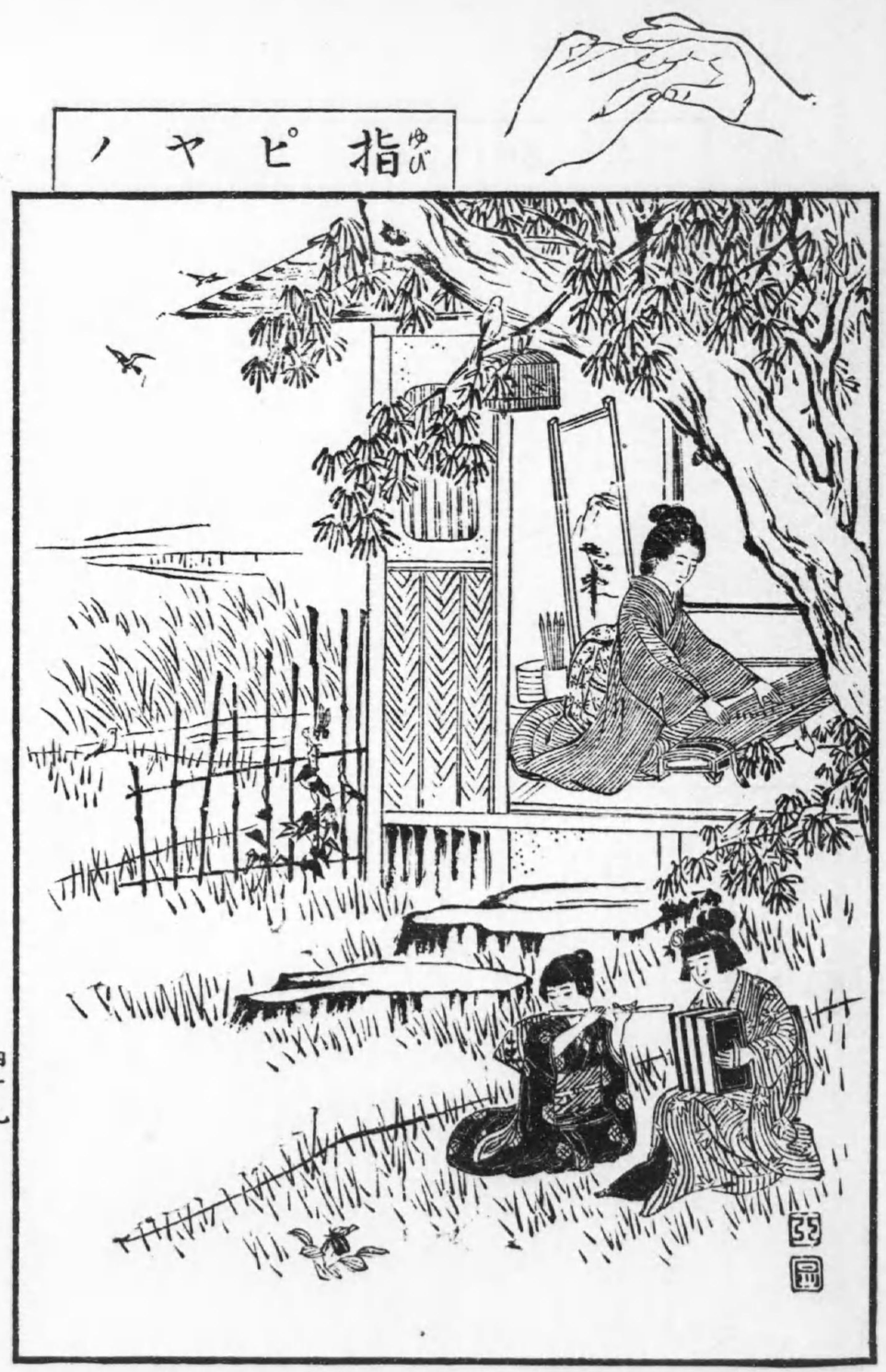


物の數
算ふる事ふハ人々ぐ
あまりおものを
おのずと
感ずる事もうをけれど
いとも貴き術ふして
心をとめて見る人を
其必要をさいとるべし、
くはしくふかく算ふる事ハ
導くをべぞ
力さそ
善き道へ
すゝむるわざと
なるぞかし、

歌、

小さき拇指ひとつ
人さし指で二つなり
中指で三つ
見て四つよ
小指で遂ふ五つなり、
のくて其指
共ふ寐床へ
眠れや誰も
言ふのけぞ
早く
あゝふ一つ
環指其次の
握をつくて
いざおはん
起すふよ
少し指ふ
起すなよ、

ノ ヤ ピ 指（ゆび）



ノ、 ヤ ピ 指（ゆび）

をさなごの
まろこ姫君（ひめぎみ）・ふまばすべ
そのまゝ咲（さ）いちらん
泣（な）きまき美（うつく）しき音（ね）ある
いざ母親（ははおや）よさゝごの
清（きよ）き調（しらべ）をきゝせまバ
泉（いづみ）とふりて流（ながる）らん

歌

小（ちい）さき指（ゆび）をうごかして
なのき調（しらべ）やせぬ
ラーラーラーラ五ラーラ
ラーラーラーラ五ラーラ
ラーラーラーラ五ラーラ
ラーラーラーラ五ラーラ
ラーラーラーラ五ラーラ
ラーラーラーラ五ラーラ
ラーラーラーラ五ラーラ
ラーラーラーラ五ラーラ
ラーラーラーラ

いざやひけいざやおせ
ラーラーラーラ五ラーラ
ラーラーラーラ五ラーラ
ラーラーラーラ五ラーラ
ラーラーラーラ五ラーラ
ラーラーラーラ五ラーラ
ラーラーラーラ五ラーラ
ラーラーラーラ五ラーラ
ラーラーラーラ五ラーラ
ラーラーラーラ

物（もの）より音（おと）のもれ出（いで）ときゝ
ある八心（こころ）のなき人（ひと）の
小児（こども）の耳（みゝ）に届（とゞ）くまで
耳（みゝ）うちひらき今日（けふ）よりも
そのゆくすえまでよろこびの

上と下へ今と早く又遅く
上と下へ小さき指が飛連（とびつら）ね
野辺（のべ）の雲雀（ひばり）の面白き
羽根（はね）うちひろげ飛（と）ぶごとく
あゝら歌（うた）のごとく

さて我（わが）ごよ今（いま）なほ
調（しらべ）を弱（よわ）けれど
歌（うた）をきけバ誰（たれ）も皆
きくふーハ
少（すこ）しとても其聲（そのこえ）ハ

小さき指（ゆび）が動（うご）くまで
なる調（しらべ）の歌（うた）まで
歌聲（うたごえ）きて大空（おほぞら）ゟ
調（しらべ）にうつれて我心（わがこゝろ）
汝（なんぢ）がまゝ小（ちい）さき指（ゆび）も
歌（うた）とふーと合（あ）せう
いざ樂（たの）しとあそばらん

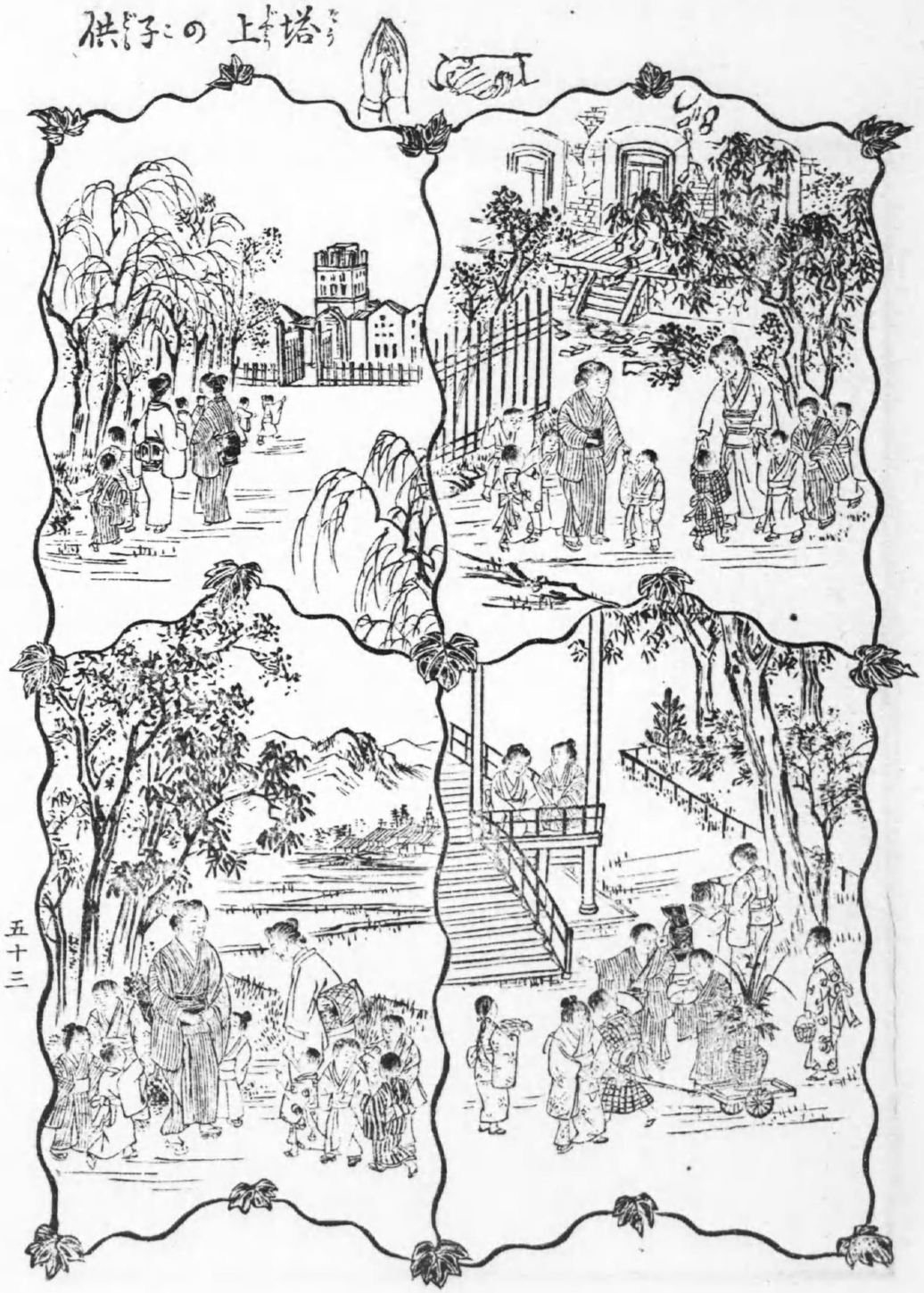
たゝおさやけく義（ぎ）や、

「そさなごの
いさや臥床の内にて
合せて母の膝下に
祈のなかふ小きほてを
ひざまづく時」

「母親よ
天地暗く静まりて
神は眠らで守るとふ
汝が願ひ聞られんと
害と恐のあるものゝき
事なども深く信ぜのし
彼等は一つの生命ふ
いとも尊き限なれ
外ふ父とのおぢし、
世界の夜の眠る間も
事をでいふくさとれ
幸福女子ものもらけ
道ふて供を護るとふ
ちごらふ救ひ授るふ
結ぶ合ふて真理とそ
式真理ふ善き教

歌、

見よをきおご八今ここに
心安けく眠りすけり
働き遊びつれたる
再び力ぬ得るごのし
慈愛の母と諸共ふ
ゑべてを命の父よふ
さらば我子等安らに
君ハ誰彼の差ふなく
眼いさべて閉ぢみけり
愛の即慶ふとく眠れ
たのひの腕ふまれ抱ひ
兄弟姉妹もろともよ
共ぞ休み時ごぎハ
つゝれ眼閉づる前
天地宇宙の創造者
祈のつとめを終りとり
とく眠れ守りまへ
呼ぶ人々ふ善へまふ」
心の寶のちごどもよ
眠りて静ふよく休め、



塔の上の子供

是迄ハ別れ〳〵に遊びしが
こゝに会して唯ひとり
又打ち棄てられて友達と
なほ一かやさきの庭、
いと美しく見渡しも
おほ広き公園をこそ
集め来りたのしけれ

歌、

今ぞ一つに打ち寄ふ
遊びを娯む子供等も
よりつの時の去れば
唯一輪の薔薇の花
如何めでたき色の花環ぞや
子供の遊もめでたけれ

両の手ふり八つの指
これぞ二人の祖母
今ぞ初めて知りぬるこゝろ
たのしく遊び語り合ふ

其両端の拇指ハ
共に久しく別れしが
よびかへつゝ来つゝも
一枝をいれて諸共ふ
父ふ贈りし花のかず

鳥の卵や其いろ〳〵
森のふもふ浮ぶ魚
兄の給ひし扱の的
今その一つ〳〵諸共ふ
指折数へつゝ「昼より八
さゝれど二人の祖母
入口近く出で往きぬ
ひとりは高く登る故
空より落ちし如くぞ
ふさも知れぬ穴の中
「そのため指もこだけしろ」
褐色なる指を見そ
低くかゝれり穴倉の
ふ諸共ふうたゝ
いでゝれり注意せ、

いでゝはくろふ倉の鴿
パンの焼きこうばしき匂
見送りの子供等の
次の遊を更ふ又
塔のうへぞのぼらん」と
「否よ」と答へて會堂の
指登り塔の上ふ
其手見えかくれしとも
今こそ下に落ちに堕
塔のこだけて落ちかけり、
「否たゞそれい家ぞかり」
二人ながらふもたびぬ
中より指ハはい出でゝ
「またびい命ひろいう

歌、

月を見よ
来りて我児月を見よ
はやあらハれて遠近の
光のまりふあらけをバ
来ませよ月ハ遠方の
我児のそでふいざ来ませ
空なる家を打捨てゝ
我身の光ハ釈もまがらず
此我光我児を
よゝなあ〳〵我ハ空ふ立ち
いさやこのハさん今宵より
きらばよ我月我君よ
へまも雲の外でなき、

月をつかなたの山の端ふ
景色さやこふてらしゆく
夜も晝とぞ思もる
ねむれる森を打越えて
「我ハあまりふ遠けれバ
そこにこゝくとかふハねど
そさふ送らん我子供
うけてのこゝろとふれよ
汝が朝ま守るべく
やさしき愛をもつとも」
うけたる児の言ち葉は

玉圓亞圖

童と月

童と月

遥かなる
み空のもとを何故ふ
近くさやけく思ふらん
深きちかひを結ばんと
おれで小さき子の心
小さく雄々しき御像を
気象を其儘と置きて
まふのわかみを知るとは、
内部の結びやるべき
相像の家を壊つよ
智恵松ふべき経あり
夢路をむさぼるねせて
つらぬものぞと告るよ、
おそれの会ぎ小ぐぞ
天のつふよのぼさせて

歌、

をさなごハ
慈愛の母が手枕ひれ
み空ふ昇る月を見て
手ぶ伸して指さして
見ゑへ清きあの月を
梯子ふくくいふふほど
何處ふ行きて求むべき」
心濁らぬ顔をもて
つくろ見よし傍の
それと見るより走りて
「梯子ぶ乗ぶ持て来ぬ」と
童の罪ふき想像ハ
月ふやひふきけん、

家の門ぶぞ出で来る
清き光や慕ふらん
母が云へらく「母上よ
我手ぶあれば觸ぶハ
天ぞそでく女梯子
空ふ達せん信仰の
ちばら考へやりて
壁ふたてたる長梯よ
小さき腕をうち伸し」
いと聲高く叫びたり
大空高く登りて

童の心ハくだかり
遠き空のもとを見て
望むハ何の故ふるぞ
開く助とある教ぞ、
撰すをやめてねもろき
真の思想を得る迄ハ
ふたゝび見ゆるもふより
其時ぞ安らーき
かる思念ハ幼児の
さふ童の雫とろしき
「まべてのもと見ゆる如く
童ハ空を近ーとし
かゝる童の其腕を
樂ーき林を結ぜよ、

少女と星

をきなごは
いとうつくしき ものゝうち
類もあらぬ よきものを
我最愛のたらちねふ
くらぶることを 樂しみす
是ぞ活たる 恵 姿を
近く與ふる 道なるよ、

少女子ハ
晴れもやけき夕暮ふ
遥けき空を眺めつゝ
樂しく叫び云けらく
父と母との星もがらん」
「二つの星ハ輝きて
み空をてらせるあの光
まろ〳〵とふりてもゆらを
されど輝くあの星ハ
星の群居ふ圍まれて
事も得ハあるぞしも
おぼろふ霞むことうとも
黒白もかうぬなゞまの
淡きまゝ存在かの星ふ
没うけく道ハ迷ふまじ
生命の道のみちもがら
誘ふるとも迷ふふよ
道を歩みおゆかん、

母と打つれハ歩ハ
二つの星ふ眼とそゝぎ
「あれ並びて歩くなる八
母ハ静ふ教へけり
母ハ身が心を樂まん
まん身を平とまるもの
平和の景をこゝろとり
光も薄く數えれぬ
るぎなく道をさぎらを
よゝやはふかの星の
清き光を放ちて
音のかげをべ照らふん、
授けるふらむ生涯の
まゝ身が迷らん七ふの
ふき光ふいのばかり
靜ふ潔き一ハ肋の

壁ふ映る影鳥

壁ふ映る影鳥

早くより
汝が子ふ知らせ 此 真 理
その母と心を
ものを残らば 其 手 もて
捕へられぬと
いふふとを、

歌

小児、

愛らし小鳥よオ、小鳥
手とらー小鳥よオ、小鳥
たどれば遊ぶ舞び去るふ
我とぶ間ハ動くふよ
舟、

小鳥、景そうまれり
好むおふくとびあそび
汝が心をぞたのしまん
ふーき道のみちながら
影の小名小里ふとび
財貨ぶかりを慕ふ身
知らぬといふの外ふー
寶も心のたのしみも

壁ふとび来るオ鳥よ
我とぶ間やとぶりて
愛らし小鳥よオ、小鳥

指さしよふのと抱らなど
壁の上下のけりつて
見よ海がしく人生の
汝を誘ふ快楽ま
心ふとめて思へらし
なほいや高き哉悦を
このふとはりを悟りもバ
猶汝がものとふるべきぞ、

兎

兎。

ともし火の
このやく時ハ白壁を
かりて手ぶり遊ぶなる
間ハ置きて見る時ハ
生物の影ぞうつり行る
ふきの事と思ひちの
小さき指をよく用ひ
かゝる子供の遊こそ
さきる景もおかり行
ぬを壁に燈火の
其白壁ふかりくと
子供らそゝをおめつ
とやゝ子ふ教ぶし
生物造る其術を、
尊き技術のもとなれ、

歌、

見よや見よ
冬も跳越すあの兎
子供らの追ひかけば
見かへりさき耳をたて
今は草葉を食ひつゝ
ゆき又鼻を上す高け
あれのまふ蹲踞り
獵師ハ下駄をひそめ
山風さと吹き下ろし
雪ふる獵師ハ敗られつ
さて我歌も終りけり、

狼

荒野の吼ゆる
森ふ眠れる
たゞをさふごは
生物の重を
猪の
母より聞のんと
待つもたのーき
虚ーく清き
あらきけものく
打聞く子供の
つくゞなのむる
心の底ふ
愛の泉や

狼
猪！
何ふても
好むなり
ものゞたり
耳をたてゝ
膝の下に
心もて
物語りを
顔をき
親の
限なき
流るらん。

歌

狼

奥山の
小暗き森の下げを
いでるものかぎつけ
逼りくて苦ーめぬ
探る果実は狼の
求むるもの、肉血のみ
ほふの奥駈入りぬ
好むといへど猟師ハ
猟師いふほも狼の
森の遠近のぞ
此狼ふ打ち向けて
のれもつのれも足早く
遠くのがて叫びつ

遠近求食る狼ハ
うゑ刻ーと彼の身1
そを湊々と草分て
餓ある腹を首ふらび
求めどびつて森ふく
されどものいふ物を
逢ふ中々ちゞ
餓色如くに目をつけ
かくと見るより鉄砲を
ドンと一発放ちけり
森より森と奥ふく
又もかくふのさるぞ、

玉園亞畫

歌、

猪

奥山の
みどり小深き
遠近に
いのなるもその
餓えたる腹を
木陰ふつもる
拾ひたーふみ
かゝるところふ
小銃の音は
今や猟師い
猪は早くも
森の中
猪は
のきつけー
みたさんと
どんぐりを
食ひ居たり
かなたまり
響きけり
あらもれぬ
まげ去りぬ、

窓ふさし入る日の光

子供の五官ふれしとき

其心こそうたれたを

よろこばをもて打たれたり

透明る光のうちふこそ

すべてのものハ住みふけれ

清く尊くまさとふる

子供の生を送らせんと

労もるこそハ扨親の

いとも貴き務なれ、

歌

輝く小さき窓を見よ
窓は光をみちびきて
たのしき堂ふ満ーけり
窓は終日輝きて
油ふ愉快を與ふなり
オこをさふごよ我愛よ
このくゐらけく清らけき
光ふ伴んとつとめよや、

たゞひとり
世に住むみなの観念を
音界の中より一人ゐて
其一部そと知らめよ、
通ふ内ひそめる
童ら眼を誘ふる
そがごとくバハと深く
外の耳ゐハ聞えぬも
屢〻喩とふりて種々の
かゝる教の言の葉を
又さづらふも生涯を
幼な心ゐ起さくれな
さまざまのいろ生涯の
外ゐあふる現象ぞ
真理まをり見せむと
遠く遣けき眺ゐそ
感動せむるものゐて
その耳ゐ解せらる
貴き教を語るおれ
解きるる供樂りも
幸ひ深くぞ送ほし、

歌、

格子窓より大空の
光ハ曰く「吾ハ汝と
汝も樂らく思ふらん」
オつらゐれよ愛の光
なりと思ひ迎ふなり」
知るか我ハ天津日の
我をきほこ達むそ
近〻と思ふ我ゐ
此光をバ用ひませ」、

清き光ゝ入り込みぬ
共ゐつるよそなの光
ゐ供ハ曰く「あら、れよ
のびやく汝の本るをバ
光ハ曰く「をさおごよ
但所より降ります
なゞきみ空の路程も
つまゐをきおごぶに

炭焼人

わづかなる
もとくおさいりも
多くの仕事成
又くるしみも
見えぬ處ふ
のこれて知れぬ
尊き仕事ハ
さらいふ子供よ
身より教を

いのばゝを
世ふいふす
いのばゝり
かくるらん
こさろよそ
任むもれを
炭やきの
受けよゝし、

足曳の
深ぼ山の奥ちおのみふ
あるまふ舎の小さくて
小舎こそいと狭くとも
うき世の塵も白雲の
炭とともにこそ安るとけも
食るも道具も造らん
森ふ炭やく父とふが
水ふ汲ひて繁ふ散る
たゝしのひつ人々の
ゑりせバ朝夕ふ
誰が作りて供ふべき
尊き山ふ焼ふ神をいへ
食ふも樂みらんから
いのふれけて黒くとも
心白くあるも社を
いで子供寺ふ書き教へ

炭やくふ舎ふ獨ゐつ
二人の外ハ入ふこの
仏ふんのすゝきおやとふが
かくる深山の木かきりて
鍛治師ふ炭やくもやゝバ
人ふ知られぬ山のげの
煙ふ染みて黒き顔
焼ふもはらふひまもふて
いやと思ふ此仕事
我等がつふ食是ナイ
来れよ供よまてに来て
女がよきさにのふりせバ
炭やく人の顔の色
黒く見ゆれど見ゆる程
清く尊き其ん

工く　大だい

大だい　工く

善く出来し工作を見れむ　をさなだの心はそれふ　ひのれつゝ
ならめ〳〵てつく〳〵と　智恵の眼を打ひらき
外ばに非ふ見ゆる　かたちより
見えぬふるまぞ　思ふらん
ぬ何ふる用を　なきむとて
他らんーのを　思ふらん、

歌

あくるより　日ひぐらふ夕までに
いとふきろる仕事ぼて　終働く人を見よ
雲霞獲不ー深山樓も　絶ず働く大工をよ
物も短くきられけを　ひてたふされ長のり
丸き平たく粗きもの　曲るもなるは直くあり
されど大工のはたらきは　いよめらふふりけり、
多くの材木集めつゝ　これのまゝにて斯しなる
家をつくりて幼児と　一ふよをそうつくしき
害のらせじと守るまで　昼夜ぬ寝ず家つけて
大工の造る家の内ふ　其父母をも住ふらり
よけて暮さむ幸を　雨もたらしも雪霜も
こゝまき家を興なる　心ふとめて忘るなよ
大工の労ぎらくるなよ、

右と左ふはなれたる二つのもとをつぎ合せ一つふふさん越のうちふ尊きわざをはなれ〳〵ものを小さき心を思ひづらふ智恵も進みて其ねん練ハあらいるまき、

歌

谷のげの水音涼しき夕ぐれ書の巧つさ故忘もんと底もとゝえそく墨清谷かなれの岸ふさく花を力及ぎでいたづらふさまよいまそ悲けれなをに来り橋大コ組合せつて汝がれめふいでやる供等もちびてそうりきつかりつて子供い母ふ手ぬひれすごみそらふ出でふけり、くぐる岩間を打越をそ手折らむもと奥ふも眼を軒や端々ふ今やちべる供等よ扱ご棒と成二つ三つ軽き小橋を造るふり心のまゝふ其橋を大ぺの孰練をほわよし

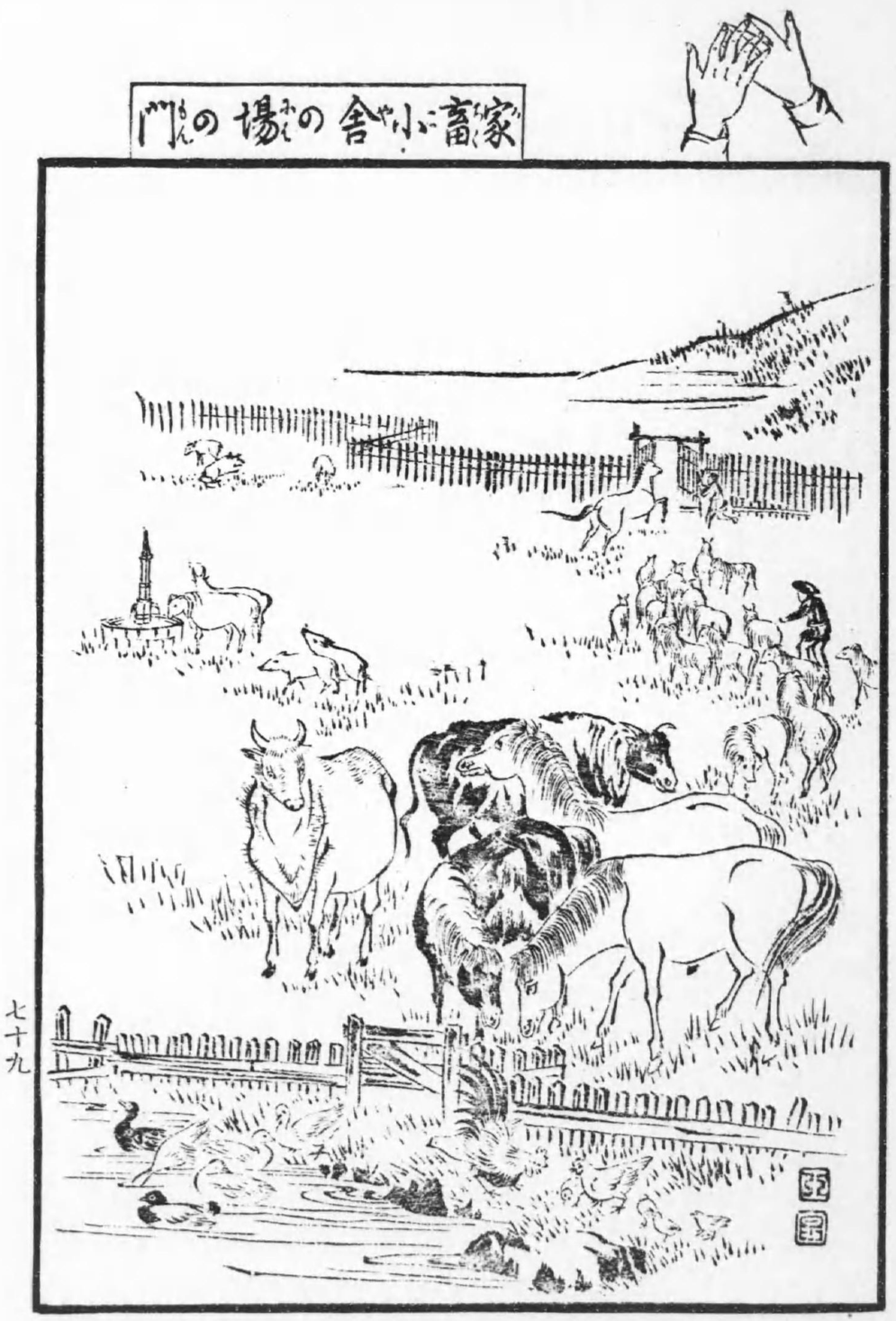
家畜小舎の場の門

母親よ
子供と語り遊ぶ時
多くの真理を教へや
物得ともその貴
資産と残る凡、
身ぶり教を典ふるぬ
ゆめいざらふ失いで
よき習慣を得るぞ、

子供が自ら悟り得ぬ
よき凡ての美き事ハ
子供が長き一生の
さらば子供ハ風よりも
心そこめて貯へつ
かな末長く保存てふ

歌

さほも何を是こそハ
家畜の小舎の場の門
門よい駅のとびらけり
ひとくさと嘶くものあり
子供の無ふる夏食ふ
鳩鴨鶏のむれがりて
があぐ〳〵鳴くものり
雛はひい〳〵親鶏の
きけろこととなて飛びまり
蜜を集むる蜜蜂ハ
ゑくと飛びまりて
乳ぼらるよき牛ハ
もり〳〵鳴きて愛らき
小牛い遊びて羊ハ
あちこちさまよひ豚又
土を食ひてうちけり
家畜の小舎の場の門
かく〳〵閉ぢつ生物の
一も外ふ失ふな
滅亡の明を打開き
無用物をしふまじ



歌

愛ふ見ゆるハ何ものぞ
花園ふ入る表門
此花園を守るあり
強きも細きもふべて皆
生きたる如く栄ゆあり
見上るばかり脊高きも
芽を茅くふしくふし
花は今ふも紐とらん
此花園の表門
花を誰ふも乱さすふ、

これらそ色香もさまざまの
善き植木屋がまめやかふ
美しきもかよわきも
雇植木屋の力ふて
霧濤至てからばしく
かつらや蔦のはふ枝も
八重ふ一重ふきまざまの
色も香もさまざまのの
かくとぎして愛らしき

生ある物を愛護する心を子供の胸より中ふ養ひ立てんとさまざまの生ある物の有様を、ことごとく示して内ある生命を事故なく学ばせ子供ふと近き楽育つる悦物を植よろこび知らせる事こそ、

歌、

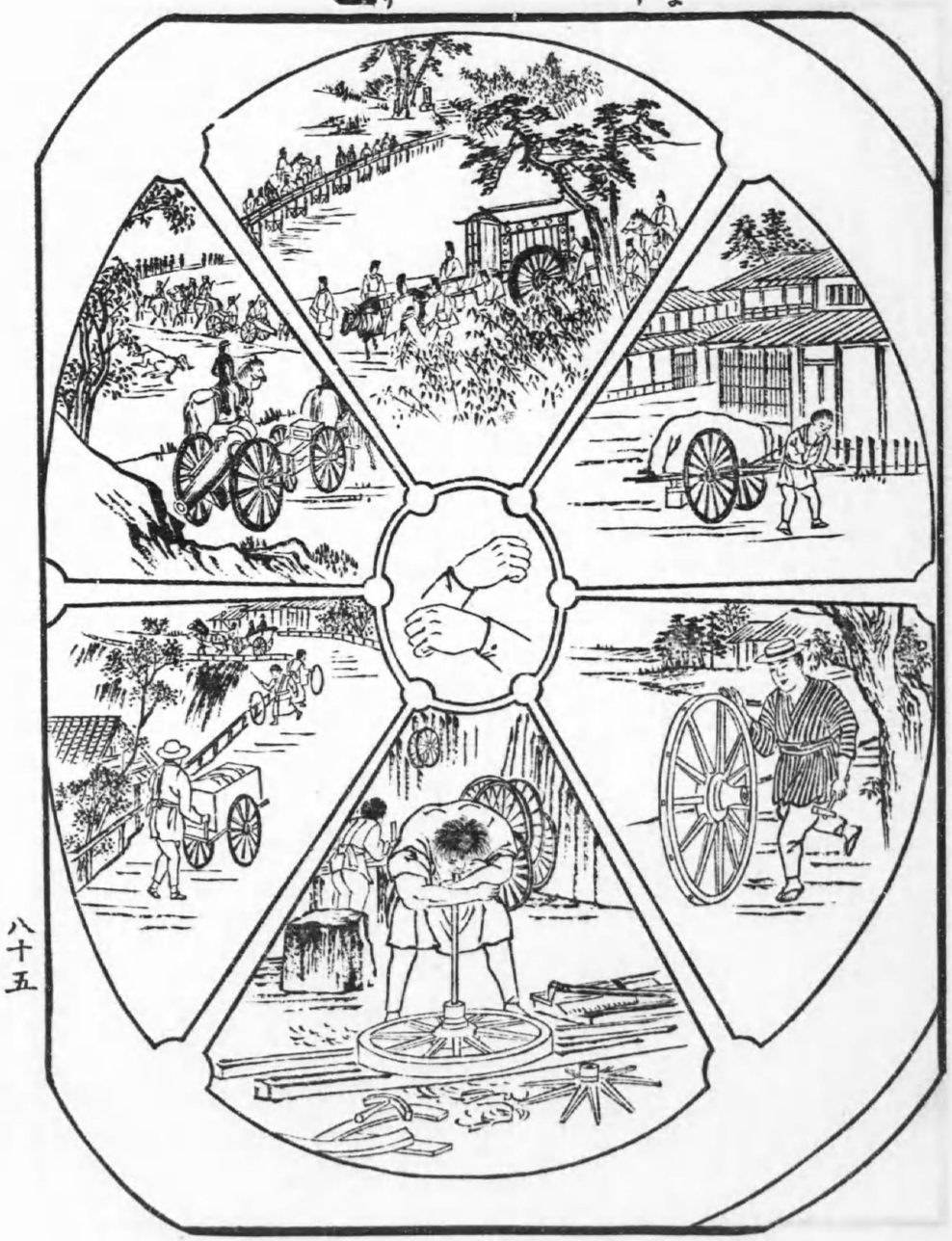
花園の蕾ハひもを解きふけり
そこかんとをれ草葉ふ我等ハめうろを其もびらハ開けゆきつゝ香をこそ四方ふはなちけれ
このぐバーきのなうつくし此我骨折ふむくひてらす日の光のうちふそだちけり、

人の手を
いとふ用ひて　のくばかり
善き仕事をば　志とげーと
知りたる子供の　胸の中
たぐよろこびにぞ　満たさる
たぐおとろきにぞ　みたさる

歌、

やよ幼児よもろともに
いとふるもとを造るわを
彼等はいふ骨折るよ
曲げどふのひふめちふ
あれはいふ骨折るま
もや其軸つぶれぬ
今よりたえばまいらはし
たえばまいらはし、

車作は其手もて
ぎ見ふちむ見ふちむ
手に取るもの大雑
ふーく孔をつけむとて
あぬ人ま車の輪の
車ぐるーまわるわり
ぎたま今よりぐるーと

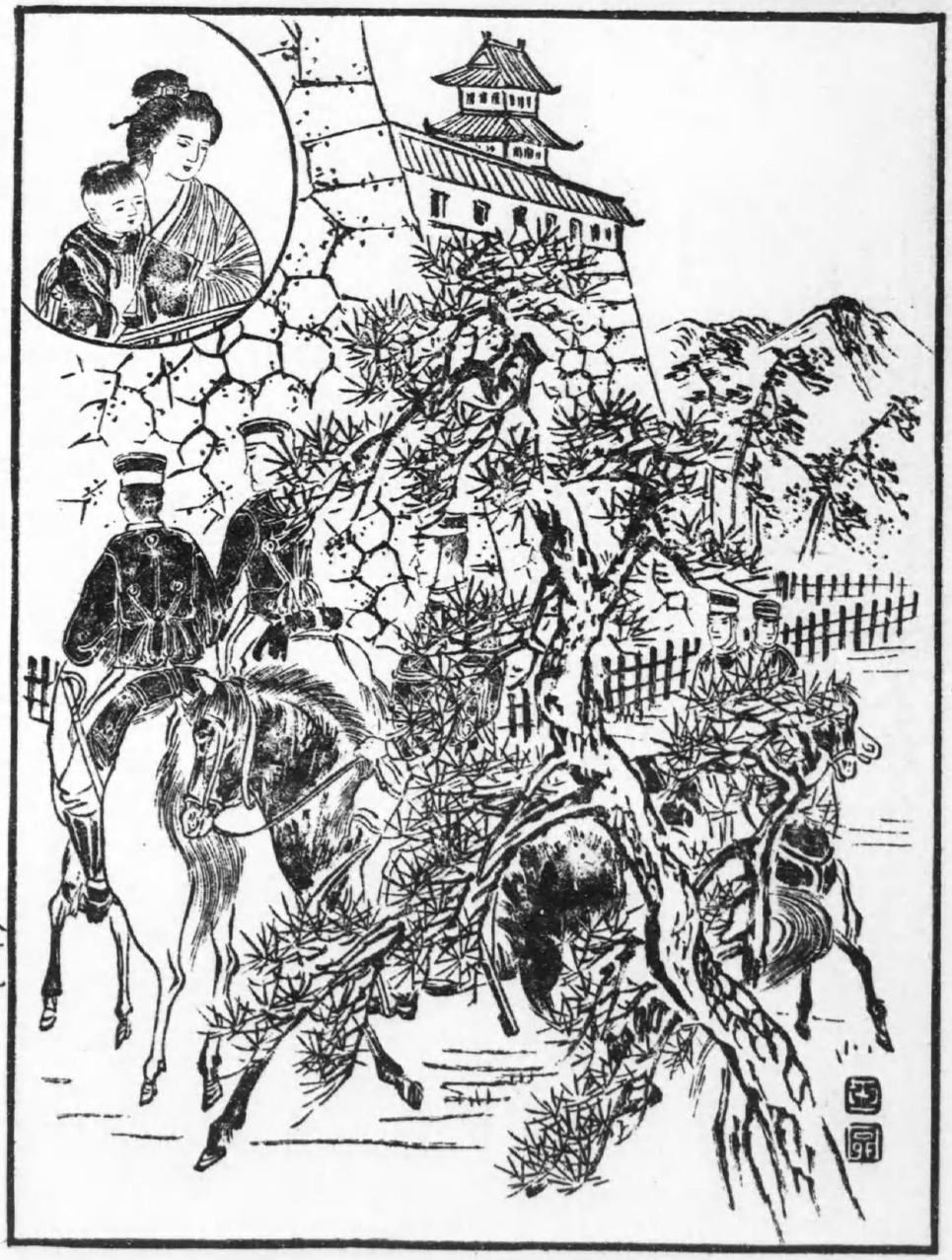


世の人が様変りたるいろ〳〵の業をそれ〳〵為す事も子供のもてあそび事こそ見のがし難けれ唯何事も見る如く仕遂るあとハ易からねど唯これよりぞ生涯のよき教訓も得らるべき

歌、

シツシツシツの音をきゝ/\て/\小木匠/\/\/\

武夫と善き児



武夫と善き児

名で一人
世を住むふ非ずふ
心の底ふもえそめつ
聲と形ふふるへたび
かくておぼろ〳〵人生の
まれそま供の新きき
さら〳〵毋なる人い皆
つどし光ふさそいろ〳〵
又外形ふの冬のころ
由都のは命ぶき起

今き観念い幼児の
ひそうかをふひぎそる
いをあづらしげふあ係せ
務をきそう初めときき
生涯の段の始まりぞ
人自ふまんいやそれ
事ようそ供を保護へ
困ふる物を主きさせば
育てのげんほげむべし、

歌
五人の武夫い馬ふ歩の
「善き武夫よ新身今
「善き子見んそ来をなり
鴿の如くみおとなり〳〵
善き子と我善きふり
優しきおもひふ云れ
「さら〳〵善き子珍ばらんぜよ
いざ〳〵早せ我愛を」
我武はめづらしき
かくてそ母の心場を
善きはは乳の多くり
善き子と共ふ住んん、
家路ふ向ふ道もの〳〵
家ふ歸らんざさらば」

城のべより入つ来る
何故ふ〳〵小来ませぞ」
いでや善き子な見せよ」
羊の如く打笑ふ
なき武士のあろふる
汝のをきふを祝ひ兄」
寶と思ふ我士ごそ
「をきなごよ
汝が祝福を祈るふり
吾ふ愛ひる事玖堪
なお我慢とと〳〵ふ
きて我ふ急ぐべ〳〵
歓悦なの〳〵み伴ひて

武夫と愚児

人ハ皆善を愛する者ニて凡て皆
善の善人ハ少ーの悪をも
此さとわまをいとはやく
子供ゟ知ったぞかなめなる
さらバ生涯のよろこびは
いので彼ゟりはなるべき

歌、

六人の武夫ハ馬乗なり
「善き武夫よ手身ハ
「善きこと見んとて来り
「汝武士よ善き人よ
ほん身ハ我子た今ハーゟ
我ゟけ外は何ごとなく
家中さわがん大聲ゟ」
「あ、我心をいたむるよ
たのしき歌ゟ放ざらむ
善きこのかふとゟ」

城の門ゟり入来る
何故ここに来ゟせ」
いでや善きこと教せよ」
我ゟ悲しさ外いにせん
見せざらゆの悲しさを
機嫌るくて泊き帰ぶ
ゟ我今は汝ゟためゟ
かゟ安ゟのむぎ外のむ

武夫と愚児

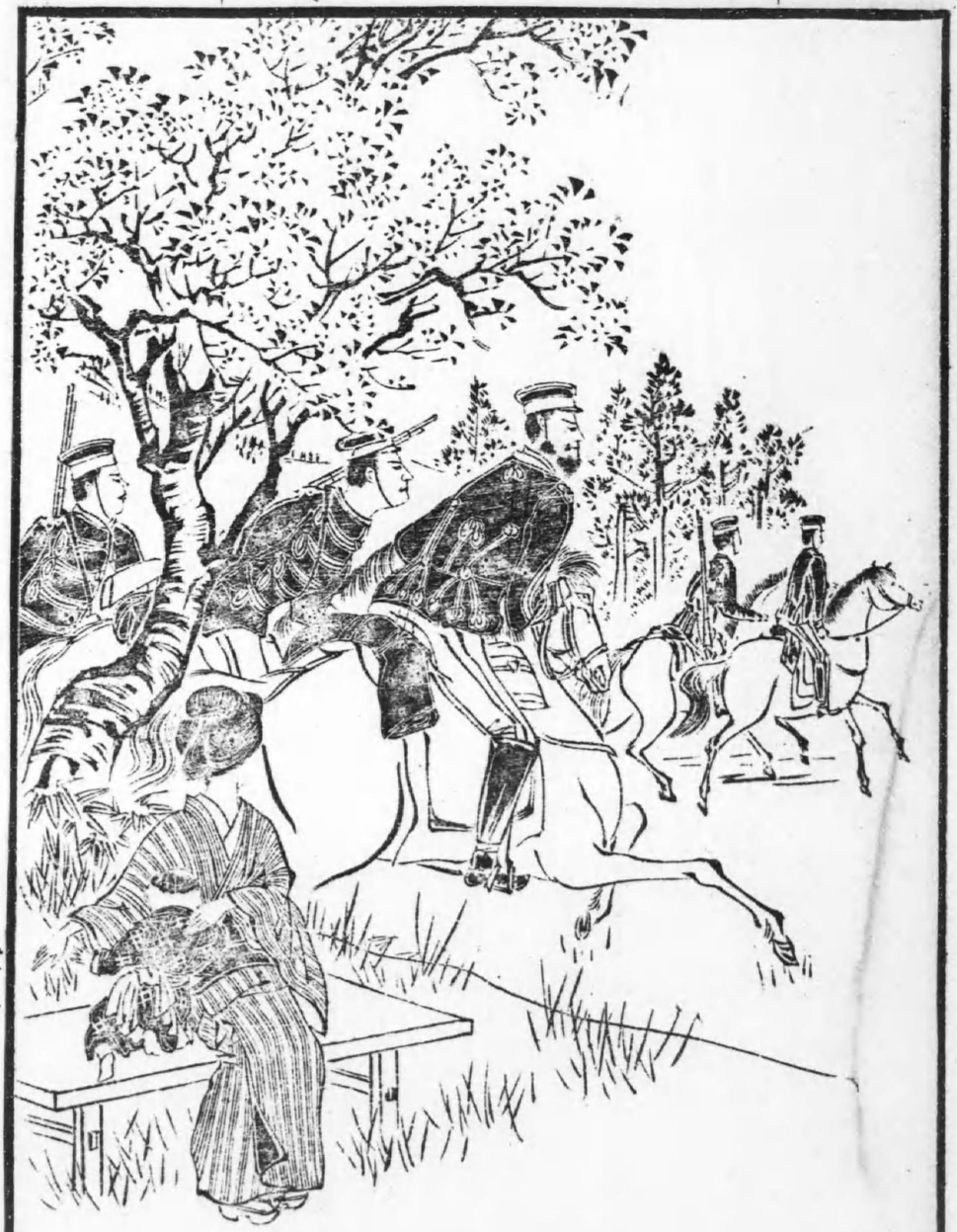
隠れよ我が児

をさなごふ
善を識別する
養はーむるぞ急務なる
善をばおほく積みぬれど
其の楽もいやまさん

歌

あれ見よ五人の武夫は
馬をならべて馳せ来る
彼等は我子を要めつゝ
伴なひもいん為ならん
隠れよ子供ものかげふ
在所を彼等ふ知らすふよ
たゞ願はくば武夫等
寸時もおゝふとゞまるふ
我子のおゝふ見えざるは
さだゝみ知を得し事ならん
飛びつ駆りつ往き還ぎぬ
いぎ身をつらもせ我子供
さらばの詞をおゝふ言へ
をや武夫は景もふし

隠れよ子



何故ふ迷藏をする時ふ幼き胸ふもひそむるかる遊ふ幼児を其名呼ばれ我らこの快悦の原由なれ心用ひてする時そ進歩を得る道とも、倚頼の念ハ幼児のし念よそ未長く艱難危険ふ遇ふ

我ほはろびいさむ危簡人性ふ観念よそ婬まーむる原由なれ蒼人とそる意識そかくれんぼうの業遅生活上の新しき今やきーき信仕と心の中ふおき初めぬ生涯の間住みのこり勇気を與ふる力なれ

歌、

かくれ太郎いざ我ら最愛の幼子は何處ふ居るそ幼子ハきもかくこもさびたり何處ふ我ふあるそ危あはれ招き感謝もてア我児ふに居さり我ふい近ふ居たりより事実ふ半に人の世の汝かくれ太郎いざ其場ふ我ら行ハ方知れざりまけり何ふ我ふいかれぞ姿も見えず景色迄行衛紛ふぐる其人そ我名をそなぐさめん

さても我子の楽しき実ふ此世のもとへうき生涯のよすもつ

をさなごの
するどき耳も尽きの
其なのさわめ何ぞりし
問ふて叫ぶ良心の
今かへよやうかへも
かゝりぬれば今は早
消えあとゝく我せハ
結びよけぬ関係の
かくてせ命の統一てふ

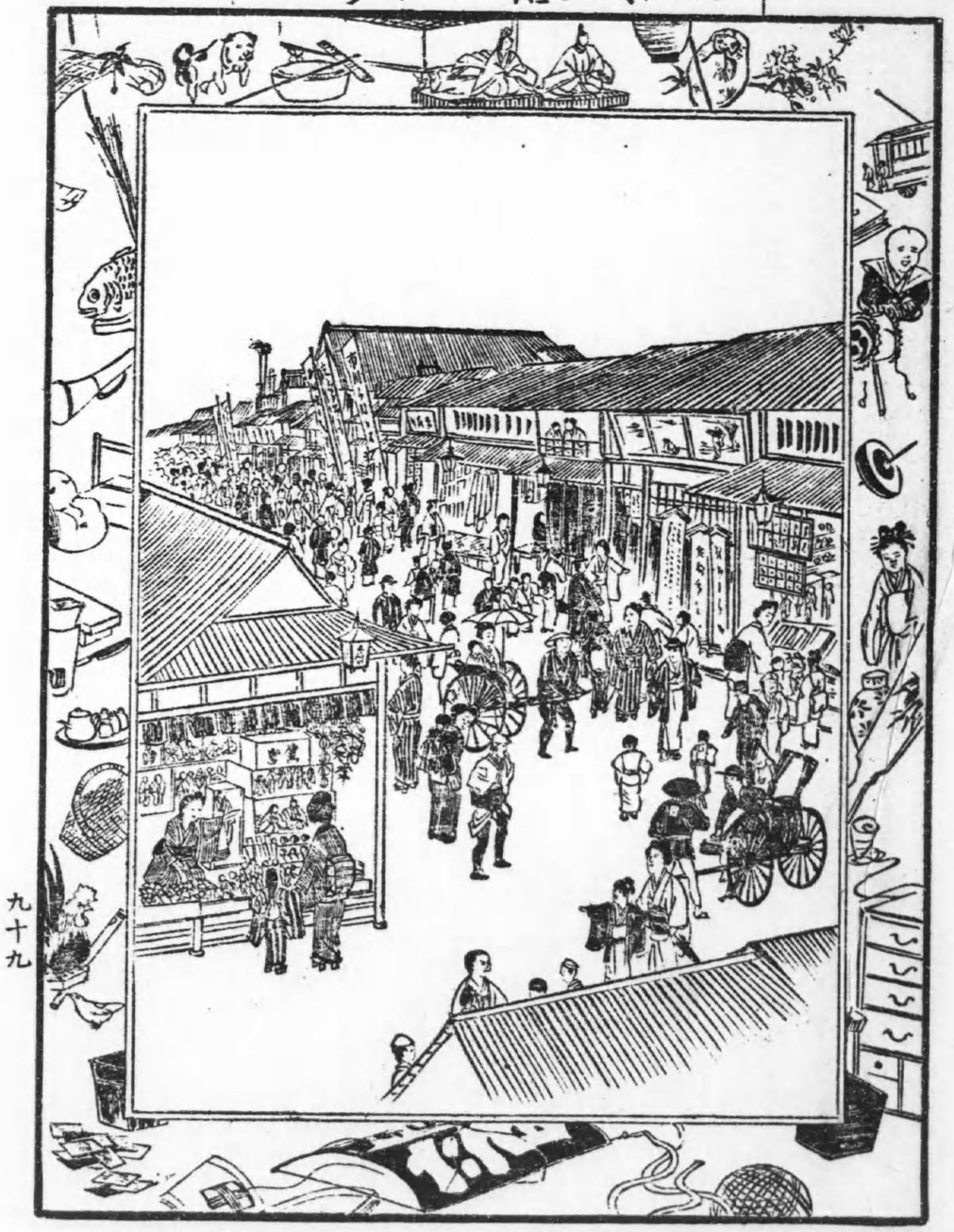
山ほとゝぎす聞し時
年長けて後其耳も
清き聲ふも傾げつ
子規音を四方ふくん、
わを一人との感念ハ
他人のせとへさ交り
ひのきてふこと悟りつ
母のまこと理をも見まじ

歌、

クー〳〵クー〳〵
クー〳〵クー〳〵
クー〳〵クー〳〵
クー〳〵クー〳〵
我子をはして渡り来ぬ
さてもふ〳〵死の床よ
クー〳〵クー〳〵
クー〳〵クー〳〵

杜鵑ハ今ぞ鳴く
その鳴く聲安元り
今鳴く鳥ハ唯一つ
さんどの今や此鳥ハ
我子ハ見たり郭公
時ハ郭公どうちつけて
ひのきれ我小さき子よ
我子供よ

玩具店と少女



玩具店と少女

子供い店のおもちやを好む
品こそらねど汝ず持つ
その樂も異ならず

歌、

「母上どうぞおもちやゝゝ
そふ沙きと戸棚あり
人形の家を飾るべき
今日ハ五月の市おれバ
どうぞつれて下さゝな
我ふ買せて下されよ」
市のかざりを見ながよ
一言ちべき事ぞなる

今日つれ出きて下さゝよ
又人形の揃ひもつり
机や椅子の品もあり
賣物ハ皆かゞやらん
其あらしてきよきもの
「ゞ下けよ我ふ供
されとそ折ふ前ふ
我伴ふべき少女よ

いつも親切善良の
老へ深く神あつく
もーさはふて意地
直ふ母の眼もこゞろて
その美ーさも見ぶ給
「来ませ母上いざさらば
神儀ゝ参らん悦も
「おもちやゝゝ」ふ
「よき嬢様のおもちやふハ
はた織道具の外まゝ
皆美くーとぴの〳〵と
その子の樂ろ〳〵を
奇麗ゞ品物ゝり〳〵
「よゝでいふ事よく守ハ
もとめて我ふをろばさ」

二つの道を守りつゝ
誰も笑顔向くぎり
腹立て安き其時ハ
ならべ市の品物の
さらゞ賣物ゝ来ざらん」
我身ハめ何ふ親切ふ
満ち〳〵ふ見給や」
何よかろう」
「美くーしき乍車
お墓所ふ四戸棚
光ゞちて並ぶ
増させん為のおもちやハ
いざと勧め賣らん
欲ーいといふ物何ぞ

玩具店と童児

玩具店と童児

歌、

父上よ
杖と帽子とお持ち給へ
いざお伴して玩具舗の
よき品物を見ふもかな
このほゆ坊主と牧羊者
千里駈けんといさむ駒
どうぞ父上おもちやの
店ふ我身をおろさへ」
「来れ我よ伴ふかん
さればつれもく甘前ふ
我ふことなく守よ
父もち子ハ悪を避け
教を守り勉強し
仏温和ふ愉快ふる
其心の汁ひらかれバ
伴ふ父の目ふ更ふ
うつくしき物も見えさらん
よきおもちやなれ物
其子の手ふ握らるまじ」
「いざ伴れもちそよ父よ
今日ハ必ずわとみせく
市身の仰ふ従さん
玩具やさんよ汝が店ふ
」

五月祝の美しき
甚品々を持つときく
子供の好くのがもときく
善き我子供の楽ふ
買ふべきもの何やらん
よき物見せよ我ふ
よき品撰ぶ我身ふ
三輪車四輪車一輪車、
」
おれふ我物のとうて
用ひ子供を慰さん
ひとのめしき馬などの
眼を見れバ自ら
勇気起らん武外よ
弓と箭筒ハ坊様ふ
弓ひく矢ごろ射させつ
力養ふ事ハ勿論
数限をふきふ々は
一々きつにのべさし
そくとぶんで自身ふ
品々おえらび下さね」
「さらバ我現まずいま
さふよい物撰ぶべし
よふて言ふよくバ
坊やのほしとふ物を
買ふ望を充めん、」

會堂の戸及窓

萬のもの和合して
聖き調和をおもはせ
取まかれる思ひつ
畏敬の念を傾けん
何事よりも、いやさきふ
ひとつ
ひとつ
ひとつ

汝が子の示し熟練は
いふ小さきもあらんとも
我見るもはすべて皆
もれやすめいと細き
天ふ張る大海も
世界を照らん天つ日も
神ハ口ふ
我幼児ハ氏法則
さらば小き熟練うり
汝は命と甘意志とに

歌、

汝が指を我ふ掘らせよ
我等ハ美き恵をかん
茲ふ飛び来る小鳥あり
かゝる小山を打越えて
此又小さき梢ふは
梅の果熟して汝を待つ
これある小枝の上見れで

汝がため軽き大きゝもの
今ふ大きくありぬべし
ものつくれぬほど大ふる
塵ふ起りし時あらき
玉源ハ苔の衣
むじめい東雲の
最小のもまふ虫ぬれ
導守らんとなふ得ぬ、
大きゝ心をいろ〳〵ため
應用せーめよ聖語、

鳥が小さき巣を作る
小あのまねりごことふく
小鼠の来て走をかむ
我等寺がのぼる小二階の
上より窓をのぞくべし
屋根の上ふハ瓦あり
壁ふハ鏡をつけてあり
部屋の中ふハ高机
机の上ふハ大きゝ魚
是なる小橋ハ水清き
川のなたふ我を渡る
茲ふハ高き梯子あり
茲ふハ仕立屋の鋏あり
茲ふは高き鳩小屋あり
鳩ハ出入ーつ飛び遊ぶ

さの雄鶏ハ時をつくり
ふ小鬼ハひとり舞く
小さく平たき鼻を出し
空ふ鬼も我ハ見る
これ鋸ハ利く長く
又この真鍬ハいと強し
用多き梨地我ハ作り
僕の持つ水はを我ハ示し
友をうれしく載する馬車に
輻と轂とを持つ車輪あり
日ぞかゞやきつゝふてり
星も愛しき影をぞ送る
眼の光ハ美ーく
夜の星ハ又数多ーく
星ふ代雪の下ふ咲く

花ハ開を我ハ知る
夜の空ゆく月ハ
働く人を照をかり
月ハ開ふ従ひて
其老たるの少きゝを
知る得る事も出来る
最後ふのぞみ我々は
このねて親む教會の
門を開きていざ入らん

作りしもよいろの皆
これを造るー其方
さても子供が眼奥を
世界の衆動を見渡せば
もーや生涯枝術家の
縁ぞ結ぶ時ハ富みつゝも

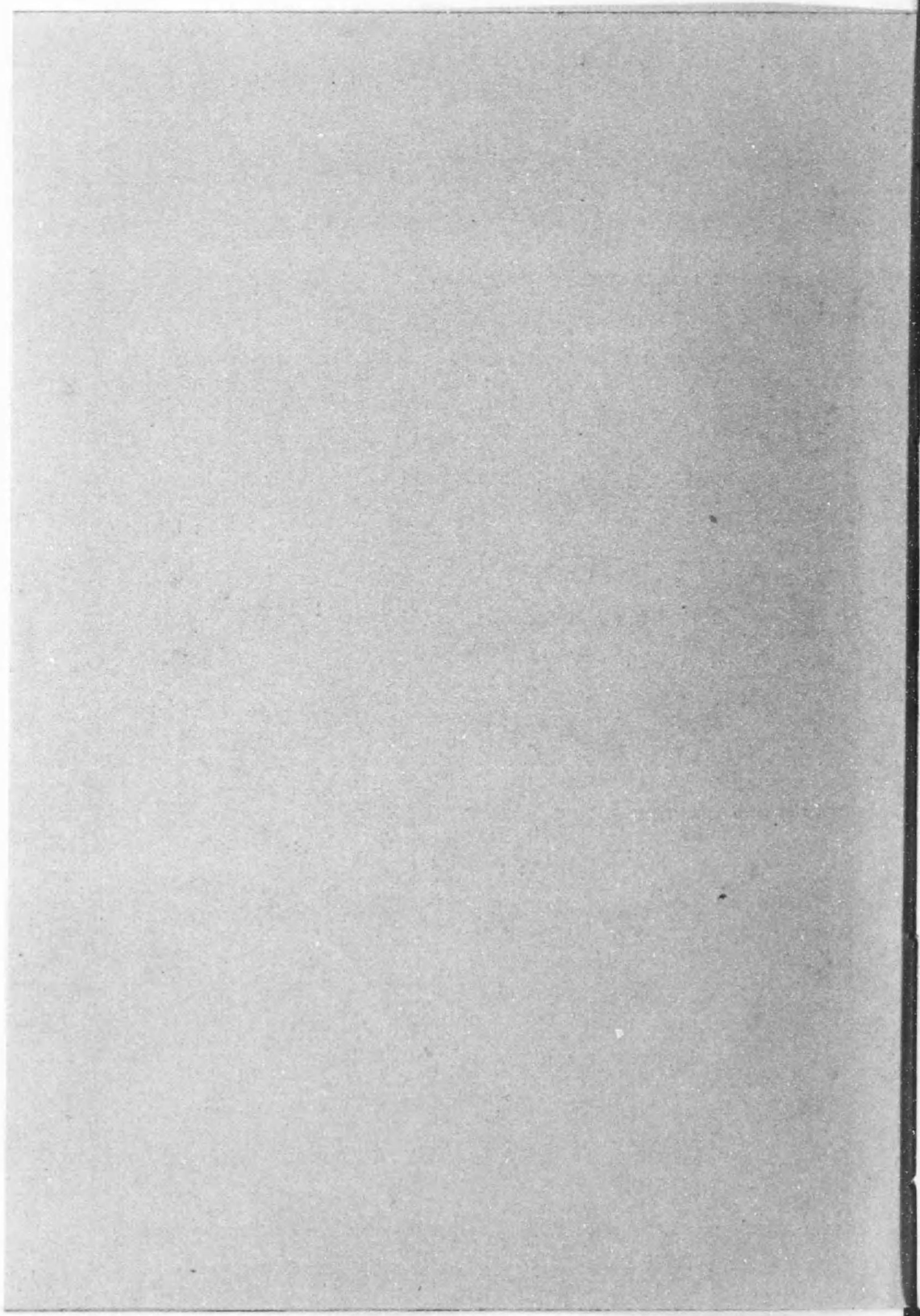
作りしもよいろの皆
盡る時こそ来らめ
永遠までもつくりたし
四方ふいろ〳〵で見ゆる
ものふあまふのもふ
働くらん其時え
世界ハ常に徳ふ待つ、

小技術家

結尾の歌

母親が
子供を養ひ
如何ふる事を
いとも楽しく
遊戯と唱歌ふ
其作業ふ
活潑と愉快を
思慮なる勿の
つもりてゝ
千代八千代の
幸福となり
幸福とふり

育つるふは
なす時も
熱心ふる
たよりもて
新鮮なる
興ふなり
愛情を
幼児の
未までも
はたらこんと
も勿らかん、



母の遊戯及育兒歌下卷目錄

口繪及序畫の說明
第一母と兒……一
第二……四
第三其子を思ふて他念なき母……十一
育兒歌の畫圖の說明
一手足の遊……二十三
一起臥の遊……二十八
一風車……三十一
一皆すんだ……三十五
一味の歌……三十九
一香の歌……四十三
一こっこ、こっこ……四十九
一草刈の遊……五十三

一雛を呼べ……五十七
一鳩を呼べ……五十九
一魚……六十
一的……六十四
一菓子揉……六十七
一鳥の巢……六十九
一花筐……七十四
一鳩小舍……七十七
一小さき拇指……八十五
一拇指曲れ(指遊び)……八十七
一樂しき家族(祖母と母)……八十八
一小さき拇指一つ……九十一
一指ピアノ……九十三
一危害を離れて安全なる兄弟姉妹……九十七
一塔上の子供……百

一幼兒と月……百二
一一歲半許の童男と月……百三
一二歲未滿の小女と星……百四
一壁に映る影鳥……百五
一墻壁上の兎……百十三
一狼と猪……百十五
一二個の窓……百十八
一炭燒人の小屋……百二十二
一大工……百二十五
一橋梁……百二十八
一二個の門……百三十
一幼稚なる園丁……百三十三
一車匠……百三十七
一小木匠……百四十一
一武夫と善兒……百四十二

下卷目錄

畢

一武夫と悪兒……百四十八
一武夫より隱匿……百五十一
一迷藏……百五十三
一杜鵑……百五十七
一商人と少女及商人と童兒……百五十九
一會堂の戸及窓……百六十二
一小兒の畫……百六十四
一表紙畫の說明……百六十六

母の遊戯及育兒歌 卷之二（母の爲め畫歌の說明）

口繪及序畫の說明

第一　母と兒　（口繪）

母たる其身の地位の高貴重要なるを體認し且つ其誠實慈愛なる心情に於て「來れ我儕をして子供と共に遊ばしめよ」との言の高尚なる意味を深慮し居る母は其愛兒に圍繞せられ唱歌によりて其兒の智慮と其天然に具ふる種々なる生命の一致ことを開發せんことを勉め居れり。

他の兒童も之がために誘引せられ、亦來て其快活なる平和の團欒に加はらんとす。然れども彼等は此團欒に歡迎せらるゝや否やを氣遣ふものゝ如く、何となく遠慮の氣味にて近き來るなるべし。蓋しよく一致調和せる生命の開發こそ此團欒を支配する活精神なるが故に彼等は之を見て不知不識其本能的恭敬の念を攪醒せら

れ、爲に逡巡敢て進む能はざるなり、

此調和の生命の精神を覺知せしむることは自ら少女を促して方に成長の途にある事物に注意し、以て自然に其精神を養護扶掖するに至らしむる所以なりとす。百合花は兒童の花にして且つ其無邪氣を顯すの肖像なれば少女は特に之に灌漑し之を培養するを好むなり。而して又同じ調和の精神は亦強壯なる兒童を皷舞し之をして好んで活物の生活を考察せしむ、例へば小鳥をして高く蒼空に翔らしむべき勢力を包有する所の鳥の巢の如きものゝ、特に其注意と驚異の念とを惹くが如き是なり、

童男童女の幼時の遊戲は其慈母の愛撫に由り漸次に嚴肅なる生涯の美はしき實動となるべし是れ此初階に於て彼等は其心の深奥に潛む所の思想を活動せしめんがために種々の適當なる事物を求め以て一層強健可愛なる少年の時代に進み入ればなり。百合花の甘快なる香氣は男兒の心の渴望を醫し。其嬌態ありて而も剛勁なる姿は又女兒の心を慰むるものなり。將來開て一個の婦人となるべき蕾の姿なる少女は其均齊的に開發せし精神に由て安立すると、猶そのよく權衡を持して容易旋轉する球上に安立するが如なるべく。而てやがて大人となるべき生長の途にある男兒は其思慮ある精神に於て光明を求ながら立方體の上に堅立せり」、斯る事情の下に於て眞率、快活、仁愛、平和の花は、自ら彼の兒童に培養せられ常に生命の源泉なる太陽に向て發育せんと勉め居る所の百合花の莖より咲き出るを見るなり。天然は其晝夜の現象に於て此の如き働作と此の如き勞心とに向て其祝福を降注するを常とす即ち晝間の太陽と夜間の星辰とは共に其美しき光を凡ての母に注ぎ「思慮あり敎育ある母のみ獨り其兒をして幸福ならしむるを得」との眞理を其心に知覺せしめ。天使は此の如き純潔慈愛にして其兒の養育に勵精する母に酬ゆるの報償として平和の枝を齎らせりとの使命を致し。而して神の靈は思慮周密にして、誠實なる母の努力に對し最も高尙なる制裁を與へんとして鴿の如く天より降り雲の中より『是れぞ我心に適ふ生命の花園に於ける我小兒の養育なる』との賞詞を漏らし玉ふなり、

●第二

多福なる母よ卿は須らく其兒の事に卿の全心を傾注し」是こそは神の性質の顯現こして萬物の父の贈り玉ひしものなれば即ち神こ一なる物にして、天實に余をして注意周到に之を養育せしめんが爲め特に附託し玉へるものならめ」この感念に激勵せられ「神の直接の賜物」こして謹んで卿の小兒を見よ、

卿は方に卿自身の性質の反映なる多般性こ個性こに富める此小兒の性質は卿の敎育に由りて開發せらるゝものなるこを預期して喜悅の情に滿たさるゝなるべし。卿は卿の小兒の性質中に益々發揮し來る所の多般複雜及反對性を觀察するに當り、此等の性質は異日其齡の進むに從び益美しき形狀を以て發顯し來るこを預知して中心不可言の歡喜に充たさるゝならむ。卿は卿の心の明鏡に照し見て此等の性質がよく相鎔合して調和、光明の生涯こなるこ猶ほ彼の複雜なる外界の顯象が秩序正しく相調和するが如くなるべきを信じて疑を容ざるならん、

卿の小兒の心靈に存せる複雜及反對の外相の發現は其生命の十全なる調和の要

素こして明かに表示せらるゝなり。卿は當に見るなるべし、彼の四肢の運動及使用こ其五體及感官の活動が如何に彼の心を奪ふかを。而して又其生命の複雜なる所及其外相の多般こ反對この存する間に於て如何に彼の生命の唯一なるここを證明理會すべきかを見。又彼が其身外の事物を己が身に收取し、同化して更に之を外に發するここ恰も彼の草木が地より種々の養料を取り之を消化して花果枝葉こなして再び之を外に發するが如くなすに當り、如何に彼が自ら其獨立の個人性を感知し、又之を表彰するかを見るならん。之を要するに卿は卿の小兒の一切の擧動に於て彰はす所の此一致(萬物の內部の一致)の預覺により彼の本性の心靈的唯一なるここを曉知し得べきなり、

卿の小兒の天性、生命、靈魂、精神、預覺、感情、知覺、自識の一なるここ、並に其身內身外の萬事をして總て美はしき調和をなさしめんため、よく小兒の性を解し、正當に之を處理し、以て養ひ來りし所の小兒の生命の種々の表號の多般及反對は實に母たる卿が見て以て喜悅こなす所のものなり、

此の如くよく注意して養育する內、及卿の兒童が發達して强壯となる內に又は彼の生命の種々の表號に於て卿は遂に一の明白なる確信を得るに至るべし、即兒童は糢糊として萬物の一致を預想するのみならず又萬物は其源を生命の唯一の源泉に有するものなりとの思想に導き到らしむる所の預覺ありて自ら彼の衷に開發するものなりとの確信を得るに至るなるべし。蓋し卿が卿の小兒の性は猶卿自身の性の如く神に似たるもの即ち神の一閃光なるを明に認識するが如く小兒も亦彼自身に於て萬物は唯一の生命の源泉より來ることを覺知するなり。何となれば總ての存在と生命とは神が其中に活き玉ふことを告白するものに外ならざればなり、

故に親愛なる母よ卿が神と一なるが如く亦卿の小兒とも一なることを感じ而して又卿の小兒は彼自身に於て一外界との相關に於て一人類と一天然と一にして加ふるに萬物の父なる神とも一なるを思ひ神の小兒として之を目し之を養育する事は實に卿の生涯の最大なる問題にして又最大なる喜樂なり、

卿或は問はん。如何にして。又何に由りてか此等の事を知り得べきかと。此問題は既に鏤刻して卿の心裡にあり。卿の簡素なる母儀的擧動の中に自然に、無意識に、作爲を用ひずして顯はるゝに非ずや。卿の小兒の體軀の多般にして完一なる事——其四肢、五官、其傾向及觀察、その自覺に達せん爲の運動、力爭、並に卿及他人に對する關係、此等は實に此答解を彰はすものに非ずや、卿の小兒の彼自身及一切の生物の法則に卿は自ら知り、語り且つ感ずるに非ずや、卿の小兒の彼自身及一切の生物の法則に遵て支配せられ養育せられ訓練せられざる可らざる事を。彼の五官が能く調和活動的の思想界と相關聯するが如く、其身體は彼と物質界とを連結し其四肢は常に新たなる關係を以て彼と外界とを關聯す。將に發達せんとする彼の自識力高きに達せんとする其預覺及び將に醒覺せんとする其精神は一切の生命と彼とを一致結合せしむるなり。彼は最初此等のものと結合せずと雖とも、其時にても既に生命の全界並に靈界とは內部の一致を有することを示すなり。忠實なる母よ卿の小兒を領會することは即ち其天性を領會し此天性と相應する顯象にして自發的

に元始より結合せるものを理解し、其存在の(小兒の)凡ての法則と要求とに照らして其教育を施し之を發達せしめ、形成せしむる事は卿の兒童の教育に關する問題を解釋するに少なからざる關係あるものなり、

然らば即ち卿の小兒が複雜に、反對に、又調和の有樣に於て其天性を顯はす所の顯象とは何ぞや。他なし有情と非情とを問はず凡そ生命が形象を假りて發顯する所には普遍なるもの即ち人間界は勿論動物界及植物界にも普通に發顯する所の現象即ち是なり、

吾人は種子の中に穀物を見、卵子の中に羽鳥を見るが如く、又た感情の中に思想を見ざる可らず。蓋し眞の確實は常に不確實より開發するものなり。小兒の生命の最初の表彰も亦此の如く自然に卿に顯はるゝなり。而して生命の皮殼なる此不確實の中に圓滿なる生命伏在して自然に顯はれ來るなり。是れ卿が將に綻びんとする蕾、漸く生長せんとする仔鹿に於て常に見る所にあらずや。卿は小兒の中に存する圓滿なる生命を見て大に喜ぶが如く又生命が附與し抽出する所の一切の事を

感受するの性を彼の衷に喚醒せざる可らず。嫩葉や幼鹿は日光、温熱の漸次の感化及其周圍の最も精緻なる印象に由て開發せらるゝものなり。然して天然界に於て是等の嬌蕾幼鹿が境遇の最も輕微なる變化の爲に攪擾せられ、最も輕柔なる觸接の爲に惑かるゝが如く小兒の感受性は極めて銳敏なるものなり、

小兒の感じ易く又激し易き性は往々苦痛と困難とを小兒自身及び之と俱に居る者(特に其母)に齎らすことありと雖ども又彼小植物、幼動物が天然の顯象中より其最もよく己に恰適したるものを撰擇するが如く小兒も亦此感受性に依りて容易に自己に恰適するものを識別し其眞成なる天性を開發するを見るなり、

去りながら事の實際に於ては小兒は何事よりも第一に其の自然にして且つ自由なる發達を遂ぐる樣に促進せらるゝものなり。此事たる生命の一切の顯象、普通の活動及小兒の五官四肢全體の個人的活動中に顯るゝものにして。又其深奥なる源泉の精醇なるにも係ず往々誤解、困難、苦痛、危險を惹起する所以のものたるなり、

此の如く五官四肢百體を強め之を開發することより起りて其使用に及び、感覺よ

り始まりて知覺に、知覺より觀察思念に進み、個人及び其知識に親熟することより相關の認識に、四肢百體五官の健全なる生命より精神の健康なる生命に、思想と結合せし動作より純粹の思想に、健全強壯なる感覺より思念する心意に、外部の思念より內部の理會に、外相の彙類より內性の比較判斷に、外部の結合より遂に內部の推理に到り、之を要するに外相の領解より內性の理會智力の開發修養に達し、一切の現象の外相の理會より其基礎及び原因の內部の査察に至り遂に生命を理會する理性の開發修養に及び之を助くるに小兒の心意及び精神の敎育を以てし斯くて各個人の個性の明亮なる肖像は遂に小兒の心に顯明なるに至り、而して彼は先づ自吾を認識し、次に己が其一部分に屬する所の全體を唯一觀念として悟了するに至るべし、

此の如く卿は卿の兒童を導て事物より圖象に、圖象より標號に、標號より靈性的完全體としての事物の本性の理會に至り。此に於て個人及び全體なる觀念開發せらるゝなり。彼の敎育修養の漸次に進むに從ひ遂に卿の小兒は自己の生命は凡ての生命の一部分即ち其家族の生命、其國民の生命、全人類の生命の一部分なりとの事、及び神は萬事萬物の中に存在し、萬事萬物の中に活動し玉ふ事を明かに曉知するに至るべし。然らば彼小兒の感情思想行爲及び其身外の關係幷に其姿容に於て此の如く明白に其身內に形成せられたる生命の充實を如何に顯章せんかは此時期以後彼自身の生涯の問題となるべくして彼は此の如くにして預覺生命及び天然は顯象、知識及び默示の如く相結合せらるゝものなるを知る可きなり。生命は彼に對しては天然と人類の一致を啓示するものにして即ち亦神の唯一なる事を默示するものなり、故に其生命は平和の生命喜樂の生命たるべし。ア、母たるものよ、卿が彼の誕生以前に於て既に感じ、爾來常に卿の心に懷抱したる所の卿の兒童に對する志望は是に於てか成就せらるゝなり、

●第三　其子を思ふて他念なき母に就て

親愛なる母よ卿が卿の愛する嬰兒の睡顏を熟視する時溫和なる炎の如く卿の全

體に輝て之を暖むるものは何物ぞ。卿が卿の小兒を重要視するの大なるや、苟も之に關する事さし言へば、普通の少女にありては單に之を思ふことすら厭はしく感ずるばかり不快なる事をも卿は最も愉快なる勞作と思ひ最大の注意を以て之を爲すを見る。抑も卿をして其兒を重要視することさ玆に至らしむるものは何ぞや。痛苦悲嘆の中に養育せらるゝ所の卿の兒童の生涯の顯象に於てすら若かく卿が最も些細なる事（例へば秩序清潔食物の如き其他何にても）も全體の大生命と相關聯し、互に相影響するものこして之を見るが故に非ずや。是れ卿が模糊ながらにも卿の兒童の生命を全體こして之を觀測し個々物々如何に小なることも尙ほ自ら其進步的開發を其全體の中に現はすものなりこするが故に非ずや。卿の生涯こ事業こに以上擧げたるが如き高尙なる性格を附與するものは一個完全體こして生命を預想し、知覺し理會し、思考する事即ち是なり。卿若し卿の愛兒がよく其命運を遂げ其職分を成すこと恰も卿が自ら思慮堅忍及勇氣を以て小事を重んじ不快なる事に克ち以て女たるの命運こ母たる職分こを完遂するが如くならしめんここを望まば啻に初

より卿の小兒の生（其中に存するものは最小の事こ雖も一々深き意味を有し次第に其重要の度を增加する所の）を一の完全體こして感知するのみならず、又其內部の生に於ても其外面の行爲に於ても確かに之を知覺し之を識認せざる可らず。顧ふに卿は上に擧げたる所及卿自身の生涯及心意、知識及行爲によりて此理を曉知せるならむ。よく此の如くなるを得ば卿の兒童の生涯は其發達の各一程度に於ても亦其全體に於ても凡そ人生の顯し得る所の一切の榮光ある性質を顯示す可きなり。母よ吾人は吾人自身の生涯に於て何物か缺乏する所あるを感知し得るに非ずや。蓋し吾人は心情及心靈の尊貴（即ち最小事を抱容し而して生命の連結を成す所以のもの）を離るゝ事早きに失せるを以て晚年に及ぶ迄之を確執する能はざるは勿論明確に之を認識知覺することすらなす能はず、而して偶々之に達する時は時期既に晚く華麗富贍なる人生の盛時の既に去り其可愛の現象の永く消えて迹なきの時に過ぎざるなり。夫は儲置き吾人に取りて一層貴重に且必要なるは如何なる現象なるべきか。吾人の一層平和安全に依據することを得可きものは何なるべきや。技術は此繪畵に於て何物をば絕えず新に吾人の眼前に齎らし來るや。

技術の齎し來て茲に顯はす所は小兒の生即ち母らしき事と吾人の生涯の幼時に於ける小兒らしき事とを最も親密なる關係に結合交錯せしめたるもの是なり。然れども其實際に吾人の前に齎し得る所は僅に一種の形相（其形相は其が理想的の知覺を現はすものなれども其種類は一）に過ぎず。母が其愛により吾人の生命を養育して之を開發せし所の千百の形相は何れに在るか。彼等は既に過去の海に其形迹を沒し去れり。然れども其波浪は必らず早晩吾人及吾人の生涯の船を安全に港灣に送るなる可し。此眞理は必ず之を認識し之を確執せざる可からず、

此書に載する所の母子の遊戲に伴ふ唱歌殊に其歌に伴ふ繪畫は不完全ながらも卿をして兒童幼時の生涯は花蕾の時代にして人間全生涯發達の初段なることを想起せしむるのみならず又卿が卿の小兒に對して爲せし事柄及卿が據て以て行動せし所の精神、意見、見解、及目的に關する普通の知識眞成の知覺、及深遂なる認識に達せしむるの端を開くべし。母よ此の書を取りて研究する所あれ、而して之を讀むに當りては願くは寬容にして多く圖解の巧拙を問ふことなかれ。蓋し此書は

斯の如きの趣意を以て斯の如きの目的を達せんとする第一着の計畫なれば其不完全なるは固より言を須たず。然れども卿は之に由りて卿が從來其高尙なる職分の預想に基き本能的に實行し來りし事の解釋を得べく卿が知見知覺に由るに非ずして單に愛の感情に刺衝せられて爲し來りし方法の往々不定にして過失ありしを發見し得べし。願ふに卿若し此書により此の如くにして謙卑なる自覺の域に達するを得ば容易に此第一着の著作の不完全を看過するなるべし。小兒等は既に彼等自身の爲めに自ら之を爲せり、此等の唱歌、遊戲圖解は卿のためには明白に現在を現はし且つ未來の直覺的知覺を與ふるが如く卿の愛兒の爲めには卿の手に保持せられ卿の說話に由りて生氣を附せられ卿の愛情に由りて温められたる一種の繪本となり、彼等自身の短小なる過去の歷史即ち其最も幼稚なりし時の有樣を回想せしむるの用をなすべし。蓋し此の如きの過去の歷史を追憶し確かに之を把住せしむることは彼等前途の生涯の外部の基礎としてのみならず實に其前生涯の萌芽として緊要なることなりとす、

何となれば凡そ慈愛の母が意味深き遊戯と唱歌とをもて喚醒修養し、其深き愛を以て保護撫育せしものは必ずや永く榮えて惠の露に霑ふものなればなり、卿が其初生兒及び相次で生るゝ小兒を育つるに當り或は膝に坐らせ或は腕に抱きて其生命の微かなる表彰を見る毎に起り來る所の感は亦此の如くならずや、卿を促して愛兒の幸福のため、又卿自身の平和と安心との爲に優しくも熱心に其兒の愛撫を勉むるに至らしむる所の此の感情は反覆之を考察するの價値はなきか輕々に看過して可なるべきか。若し此感情にして言語に盡し難き幸福の感にあらず卿の全身に汪溢し卿を導て高尙なる情態に進ましめし所の祝福の感にあらざりせば如何で卿の內界の高尙なる完全即ち天上の平和、清明の若かく卿の容貌に現はるゝことあるべけんや。卿を見し者誰か之を信ぜざらんや。然らば則ち小兒に生命と存在とを與へしてふ卿の自覺と、卿の彼に對する聰明なる注視とは如何にして此の如きの結果を來せしか、是れ他なし人間たるの生命及び存在を與へられしと同時に附與せられし所の一種の預想則ち言ふべからざる祝福を預

想するに由て然るなり、

去りながら母よ、神の此恩賜(小兒)の外部の生命の保全にのみ注意する事過度なるときは動もすれば右に擧げし如き高尙なる感情及認識を埋沒枯凋せしむるの恐あり。然れども是れ必らずしも避けがたきの事に非ず。抑も此の如き感情の由て生ずる所以は何ぞや。天の恩賜の者に地上の存在を與へんため卿が受けし所の大苦痛に酬ふる甘快なる報償として喚起せられしものなるか。將又卿が其兒の全生涯、若くは少くとも其成長して獨立するに至る迄の敎育期を通じて之に伴隨する所の高尙なる養育の事を深く其心に理會せしに由るものなるか。余は後說を信受する者なり。今余をして我生涯に起りし實際的事實を描寫して余の考ふる所を明述せしめよ、

余は昔童兒たりし時、天然に關する思想の將に醒覺せんとせる頃一日余が父の花園に往き生垣の下に於て五の黃金色の花蕊とを有せる小やかなる白薔薇の花を發見せしことありき。其花は畢竟一の野生花にして、其周圍には余が

父に愛育せられたる數百の美花の時を得顔に咲き亂れ居るあり、彼花は目立たぬ處に於て人知れず僅に其蕾を破り居るのみなりき。然るに奇なるかな此見すぼらしき野花は他の百花に勝りて特に余の注意を惹き其花冠と其黄金色の花蘤とを見し時は余は實に無窮の深奥を窺へりと感じたり。爾來數年の間其開花の季節に當り余は常に數時間之を凝視せり。彼花は常に余に向て何事か語る所あらんとするの風情ありしが、當時余は之に對して何事をも了解すること能はざりしかば自ら思へらく若し余にして此花に對して倦むことなくば余は早晩此花に就て何事をか發見するを得るならんと、

親愛なる母よ。顧ふに卿は此の如きの愛此の如きの眷戀此の如きの希望を以て卿の面前に花の如く咲き出でたる兒童の淸らかなる眼睛を見其星の如き眼中に何物をか(實は天を)發見することならん。余の花を凝視せしは酷だ卿の兒童を凝視するに似たり、是を以て余は卿を了解し卿はよく余を了解す。實に吾等は其愛するものを凝視することによりて直に互に相了解することを得るなり、

其後余は我家を出で愛する花園を離れ暫しが後ち年稍長じ一層天然に親昵するに及び再び彼の花を見出せり、噫當時余の喜果して如何ばかりなりしぞや。余は彼に於て其花を見出し、昔に變らぬ熱愛と眷戀とを以て再び之を凝視せり。今や彼の花に其言語を發し余に向て「存在」てふ事の深意及び秘奥なる理法の開發を預知せよと敎へたり。而るに其花も亦間もなく彼の萬物を掃蕩し去る所の生命の潮流の中に復び其影を沒し了れり、

然れども是亦敢て永遠に沒し去りしには非ざりき。後余が成人して自己の職務を自覺せる時、彼の花は再び余と相見ることを得たり。此に於てか曩には唯預覺によりて朧氣に心に浮びし善惡、正邪、實相、假相の認識の標號を今は千百年間存續する樹木に就て發見せり。噫昔余曾て童兒たりし時戀々として此花を凝視せしが所以の理は五十年後の今日に於て始めて明白となれり。蓋し生命の眞義は余をして夙に預覺によりて生命の深奥に入り其法則と意義とを考思せしめしなり、

母よ、余が此處に標號的に見しことを卿は卿の愛兒に就て實際的に考察し居るなり。去りながら余が其標號の眞意を全然明白に理解する迄に五十年を經過せし如く卿も卿の兒童が自己の生命及一般の生命につき告ぐる事を了解するに五十年を費すべきか人生の大半既に去て餘命幾ばくもなきに及て夫等の眞理を認識するこも卿及卿の兒童に取りて何等の効用あるべきや。星狀の花若くは兒童の眼睛を凝視するの事は果して何事を敎ふるか。夫れ自己開發なる事は其花たり樹たり或は人たるを問はず一切の事物全體の存在の要狀こして附與せらるゝ所なり。されば彼が十分圓滿なる人こなるべきこことは彼の圓滿なる花木が其初發に於て既に顯章せらるゝが如く其發端即ち初めて兒童を瞥見する時既に明に之を見るを得べきなり、

之を約言すれば母よ卿の兒童に對する卿の凝視は蓋し自然の約束によりて將來彼の中に完全圓滿に發達せんこする全人間性を發見せんこする預想こ願望こに出づるものなり。然らば其所謂人性、即阻碍せらるゝなく削滅せらるゝなくして

兒童の中に明白に顯章する抽象的人性こは抑如何なるものなるや。卿の兒童は正に卿の兒、即ち人の子なるが故に過去、未來及現在に亘て生活すべき運命を有せり。彼は自己こ共に過去の天を再び存在の域に活現せしめ、自己の顯章によりて天を現在に致し、又自己の中に、未來の天を現はすを得るなり。卿の中に存する此三重の天は亦卿の兒童より卿に向て輝き出づべし、

動物は唯現在に生活するのみ、彼は過去及未來を知らざるなり。之に反して希望は未來の光景、未來の天を現はし愛は現在の天を開き、憂喜苦樂凡て內界に相一致する生命の感を叩發し而して信仰は過去より其眼を擧ぐるを見るなり。思慮深き明透なる眼を開て過去を見るこき誰か凡て善き事、誠なる事、聖き事、勇ましき事敬虔なる事に關して最も堅確に、最も神聖なる信仰を以て其心を滿されざるものぞ。何の處にか此の如く過去の事實を見る所の人にして見ゆる所のものを信ぜざるものあらんや。而して眞理を知覺せざるものあらんや。眞成の生涯を導くものは眞誠なる精神に非るか、

母よ此最も高尙神聖なる人生の三個の結合點即ち現在過去未來及人生の三個の眞靈即信、望、愛は既に卿の兒童の無邪氣なる容顏に輝き出でゝ其光明を卿に注射せり。卿が卿の冢子及び其他の新生兒に就て思考するに當り卿の天性に若かく光榮を與るものは實に人間の最も高尙なる可能性が既に卿の兒童の中に含蓄せられ居ることを預想するがために非ずや。母よ此思想を煦育せよ蓋し之に由りて卿は卿の小兒の存在を一切の生命の唯一なることゝ連結せしめ、其小さき者(小兒)の三重の性を凡ての光、凡ての愛、凡ての生命の大本原なる神に聯結することを得ればなり、

なが稚兒は
信仰と愛と望もて
生命と光明と愛の神
天津御國の民草と

天の開くを望みけり
其靈を導きて
ならしめ玉はん、惠もて

育兒歌の書圖の說明

●手足の遊

(書歌の部第十及第十一ページ)

思慮深き温和なる母よ、生命は卿の感情、知覺及思想の中心にして又勞作、活動及行爲の歸する所の燒點なり故に生命の表彰なる卿の嬰兒の一擧一動は能く內部の調和をなす所の感情と勞作、思念と行爲とを卿の心中に喚起すなり。是を以て嬰兒の母胎を出て其手足を動かし初むるや否や其生命の活潑强勢に表現するを見ることばかり深き興味を卿の心に與ふるものは他に之れあらざるべし、斯の如く嬰兒の動作が卿の注意を惹くに當り卿若し偏見、習慣若くは錯誤の爲に其誘導開發の方法を誤ることなくば必ずよく其兒の自制力を開發し强健にし之を習練教養して遂に百事の基なる自育の道に進ましむることを得べし、

嬰兒既に淸水に浴し淸らかなる蓐に仰臥し新解なる空氣を呼吸して益其全身に力の加はりしを感じ或は其手を揚げて空氣を打ち或は其脚を伸ばして四下を蹴

り所謂「手足の遊」を始むるや卿は母たる本能的自然の愛によりて早くも其兒が脚を伸して之を使用し其力をためさん爲めに何物をか求むるこゝを感知し直に其自然の要求に應じて手を出し或は胸を近け彼の小さき足をして且つ蹴り且つ壓さしめ以て十分に其力をためさしめ以て次第に其四肢の强壯を加へしめんこと勉むるならん、

卿は嬰兒が自然に現す所の運動の法則に從ひ其强壯を助長せざるべからず、さらば啻に體力即ち外部の生命を養ふのみならず又感情、知覺及靈性等内部の生命をも發達するを得べく又其兒をして卿の愛こと其周到なる注意こに感ぜしむるを得べし、蓋し此愛こ注意こは卿が其兒の發達を助るに當り常に用ふる所にして卿の言行に和諧の調を與ふるものも亦實に此二者にあるなり、

漸次に醒起增加し行く所の嬰兒の力こそは卿の愛の焰に給する膏油なれば卿は必ず其兒が此眞理を感知し次第に之を顯はすに至るを望むなるべし、圖解に於て母の傍に在る「ランプ」は母が終夜其子を看護するに當り用ふるものにして實に此

眞理の標號こして見るを得べし、力を適當に用ふればよく菜種、麻、罌粟等（國により種々あり）より膏油を搾取するこゝを得るが如く卿も亦母の愛は善く嬰兒の力を養ひ夫をして調和開發を遂げしめんがために發揮し來るものなるこゝを漸次其兒に知らしむべし、左の方なる搾油器械こ其傍の安全なる所に植ゑられたる菜種こは卿が他日嬰兒に其眞物を示し得る時迄假に菜種より油を搾り出す器械は如何なる物こ の大略の觀念を與ふるの用をなすべし。（油の材料に遺・

幼少なる兒童は男女に論なく其見る所のものを各其獨自の仕方にて摸擬するものなり、母は其兒等が未だ十分理解し得る齡に達せざれごもおぼろげながらにも天然界に於ける愛の活動力を感知せしめんこて相伴ふて近傍の谷川に往けり、男兒は其手遊の車が水に驅られて迅速に回轉するを見んこて溪流に沿ふて其車を据るによき場所を求め、其弟は兄の傍に坐し目を大きやかに開き目眩き日光に手を翳しながら餘念なく兄の所爲を凝視し、妹は亦履物を脱して清き溪水を徒渉し直に其目的す物に向て進み白砂を集めて堤、坡を作らんこ試み、而して母は中心愛

に滿たされ坐して其兒等が同一の目的を以て同一の事物に其心を注ぎながらも皆それ〳〵に其稟性の相異なる所を現はすを視察し居るものゝ如し、蓋し母は今斯く水力を集めんと熱心し居る三兒の遊び振に照して其前途の生涯を概見し得るなり、即ち兒は其目的を達せんが爲めに用ひ初めたる其活力を將來常に用ふるなるべく、少女は其目的を確く心に把持し全力を之に獻げ其生涯と動作とにより て直に其目的に達するなる可く、其幼弟は勢力の性質を研究し天然の行動の法則を査察し之に由て其目的を達する可きを預見し得るなり、實にや彼の遊戲に餘念なき兒等は各豐に其中に藏める生命を唯現在にのみ現すと雖も母の心はよく現在、未來さては過去にも亘て活動するなり。去ればこそ彼の水際に踞して唯手を擧げ足を動かす外何事をも辨へざる幼兒を懷き居る母は今しも手に籠を携へ丘の半途に登り來れる貧しき婦人に向て「何處に行かるゝや」と問ひ」我兒は疾病に罹り居り妾は徹夜之を看護せざるを得ざるが故に此籠中の物を以て油に易へんが爲め富める水車屋の主人が許に行かんとす、夫のみならず我可憐なる兒に食物を與

へざる可らざるに妾は其料を持たぬ故之を以て米をも得んと思ふなり」との答を聞き何事か想ひ起す所あるが如く餘念なき我兒を熟視して此兒の前途の生涯は、果して感謝を以て其母の愛に報ふべきや如何」と自問の言葉をもらせるなれ

●起臥の遊　（第十二、十三ページ）

全身を強壮ならしむる遊

卑近にして誰にも能く知れたる事が往々輕々に看過せらるゝは我儕の經驗上屢々見る所なり此短歌の如き亦これに非るか、人或は此歌は圖解に由て表明し得さるものなるか何故に此畫本中に編入せられたるかと問ふものあらん、然れども余が此歌と遊戯とを此に加へしは抑故ある事にて嬰兒の體育上實に看過すべからざるものと信じ且又たとひ圖解なくても慧敏なる母は題詞（歌の部の上段に）ある分をいふ）に由りて直ちに其意を悟り其遊戯の仕様を發見することを得可しと思惟すればなり、今其大様を言はん卿は其兒の臥せる「テーブル」又は臥床の前面に立ち其兩手もて嬰兒の背を抱き少しく枕より持上げて半臥半坐の態度に至らしめ而して後ち嬰兒の全身に微動を與ふる程の加減に其手を再び穩かに枕上に落とす可し、或は又嬰兒が臥し居る時其小さき兩手又は兩腕を握りて穩かに其體の上部を引き起し殆んど箕坐の態度に至らしめ而して後又徐ろに其手を放す可し、されば嬰兒は其

全身に微動を感じつゝまた舊の如く仰臥の位地に復らん、斯の如く卿の注意と愛心とに保護されて後方に倒るゝ事は大に嬰兒の體力を增すの益あるのみならず又彼をして自己の強壯を知覺せしむる最良の手段となり、然れども卿は此後も尙其生長しつゝある兒童をして斯る愛深き注意を受くるにあらざれば往々恐るべき跌倒に陷ることあるを感知せしむる數多の機會を有し之を利用して其兒を敎養せざる可らず、即ち彼降雪の夕前丘に上りて橇を弄ぶの時未だ能く橇の行先を見て之を導くの眼力なく又之を左右意の如くに運するの腕力なきを以て兒は遂に橇外に跌倒して微しく其足を傷けたりと假定すべしかゝる塲合には直に「兒よ如何に爾の視力を用ふ可きかを學び又其體力を養成せよ、さらば爾は巧に跌倒の危難を避け得可し」との敎訓を施し得べし、又寒威凜烈の朝後池に遊て氷上を滑るの時兒は放心して四下を回視し脚に任せて其行かんと欲する所に行けり、而して忽ち倒れたり然れども幸にして其手に微傷を負ひしのみなりと假定せよ、疼痛直ちに彼れを戒めて曰はん「見よ更に一層注意せよ而し

て能く其足と脛との運動を制し復跌倒する勿れ」と、又或時一少女は少しも傍視せず戰々兢々深く注意して双手に平鉢を捧げ來りしに圖らず之を取落し又童男は其捧げ來りし茶碗を落したりと假定せよ是全く其手の指の力未だ充分に強からざるを以てなり、於是か「如何に堅忍の精神あり且つ事に巧者なるも其力強からざれば到底中途に失墜するを免がれざるなり」との教訓を得可し、されば卿もし必ず其兒は教る所あらんと欲せば能く實際の生活より言葉の圖解を得可きなり必ずしも此書に縷刻せし圖解なきを憂へざるなり況んや此の如き遊戲に由りて與へたる結果は永く兒童の心中に印して磨滅せざるべきをや

譯者曰橇に乘り氷上を滑る等の遊は我邦には稀なる事なれど本文の趣意を適用すべき塲合は少なからず倒へば雪の朝高屐を履て跌倒れたる時の如き是なり以下此類少なからず、要するに本文は唯一二の例を示せるに過ぎざればよく其の趣意のある所を察し之を實地箇々の塲合に應用せんこと最も緊要なり

●風車　一に風見の鳥　（第十四、十五ページ）

手及ひ臂の關節を運動する遊

嬰兒の前腕を出來得る丈け垂直にし其手を同じ方向に伸張する時は拇指は頭及頸となり他の四指は尾となり而て平たき掌は體となり宛然雄雞の形を成すべしかくして其手を彼方此方に動かす可し　譯者曰圖解には鳥を以て鷄に代へたり是全く本邦の習俗に從へるなり

此遊戲は此の如く簡易なり然れども能く嬰兒をして樂まし幾回之を反覆するとも其快味を失はず嬰兒は未だ一語だも語り得ざるなり、去ども母が「如何樣に風見の雞が旋轉するか」又は「風見の雞を旋轉して見せよ」と云ふ時は兒は實に愉快と熱心とを以て其小き楓の如き手を動すなり、加之尙深き興味の其底裡に存するを見る、試みに嬰兒の前面に少許距りて立ち一物を動かし見よ動きつゝある其物よりも、何者が之を動かすかと其原因を發見する事が反て一層の快味を嬰兒に與ふるに非ずや、嬰兒が此の如く愉快に且つ熱心なる所以は其手の運動が常に其筋力

發作の感覺に伴ふを知り原因と結果の聯結を感知するが爲めなるを知らざる可らず、見よ兒は既に動體の中には必らず之を動かすの原因即ち之を動かすの勢力存すとの事實に關する知念を有する事を示せり、而して直ちに凡べて活動する物には必らず活動する所の勢力其中に存せざる可らずと信ずるに至ては亦是れ自然の歸結なり

少しく風ありて殆んど暴れなんとするの日に家の前庭に子供を伴ひ行く可し、何地にか身を忘れて我を愛し吳るゝ母と共に出で行くことを好まざるの兒あらんや、聞けよあの竿の上なる風見の雞の鳴ることを風は其尾を右に左に動かしつゝあるなり、時に雌雞は其誇り貌なる雄雞に伴はれて來れり、然ごも彼等は風見の雞の如く全く風の自由にはならず、彼等の尾は風見の雞の如くに風の儘に靡き居らさるなり、又如何に風が懸け曝され居る衣類を吹き鳴らすかを見よ、衣類は恰も強き風の物語を語るに似たり兒等は如何ばかりか此風の物語を喜ぶやらん、男兒は浴せんとせしが風に妨げられて果さず其手巾を長竿に結び空中に之を振り舞し

つゝ遊べり、少女は肱を伸ばし張りて手巾を持ちて遊び亦等しく喜こべり、他の兒は紙鳶を飛ばして更に又喜べり、「カツタ」「カツタ」と彼處に鳴るは果して何物か是れ風が風見の雞の尾を迅速に吹き轉はして此音をなさしむるなり、大なるものゝ爲せしことにして小なるものゝ摸擬せざるは鮮なし（故に生長せし者は少者の面前に於て其爲すことを愼まざる可らず）一兒は手に紙にて作れる風車を持ちて走り來れり、見よ如何に彼が走るにつれて風車が迅く旋轉するかを、彼處に居る母は辛ふじて其少女の暴風に吹き倒さるゝを護り得可し、然れごも大人は跌き倒れさる樣に自ら能く其體の平衡を持せざる可らず、

「母よ今日は風强くして何物も之が爲めに吹き靡かさるゝなり、見よ如何に姉樣の頭髮を吹き靡かさるゝかを、風は何くより來りて斯く萬物を吹き靡かすか」、「我子よ予今爾に之を告ぐるごも爾は之を解する能はざるべし、予は爾に告げて其風の原因は空氣の壓力若しくは其密度ごの變化に在りごと云ふごも爾には唯外國の語の如く聞ゆるのみにして何の意味もなかるべし、爾は到底予の意味を了解

せざるべし、然れど我兒よ、よく考へ見よ我等の眼には見えねども此世界にはいと大なる勢力ありて多くの大なる事小なる事を成し遂げ得るなり此理は爾にもよく分るならん、吾儕の周圍には眼には見えずとも我儕のよく知覺し得べきもの尠からず又吾儕が知覺し得るのみならず眼にも見るを得れども其何故なるかを言語に述べ得ぬものも亦なきに非ず爾は爾の手の運動を見るを得可し然れども其手を運動せしむる手の中の勢力は爾之を見ること能はざるなり故に爾は爾が今感知する所の總ての勢力を考へ且つ養ふべし、竟に爾は縱令眼以て見る能はずとも雖ども其何れより來るかを更に善く了解するを得るに至る可きなり」

●皆すんだ　（第十六、十七ページ）

手の關節を動かす遊

手を乍ちにして地平線の位地に、乍ちにして垂直の位地に轉ずることは物又は人の既に去て今は此處に存在せざることを現すなり。此遊戲亦手の關節を運動せしむる遊戲なるも其圖解に於ても其意味に於ても前章に示したるものと全く正反對を爲せり、即ち前章には十分の充實あり此處には空乏あり、前者には連續あり此處には斷絶あり、彼は現在に關し是は過去に屬す、之を要するに二者の相異は一は現に在るものに關し一は曾て有りし事に關するの點に存す、夫れ人何の處にか先きに在て今や乍ち無きの現象を見ざる事あらん、在りし肉汁は既に盡き滿ちし皿は既に空しく輝きし燈光は乍ちにして既に消え失せたり、之を對比して教訓を得せしむる本章の意味實に此に在り、

父に伴はれて野に出で行ける犬は既に其食物を食ひ盡せしが未だ厭かざるに似たり然れども既に何物もあらざるなり。兒童は渴けり渴て姉に飲を求むれば「既に

無し」と答へ、空杯を倒にして之を示せり。兒童は此意外なる答を不快こして思はず其顔を反けゝれば敏捷き猫兒は其隙を窺ひ徐かに匍匐上りて其傍の「パン」を奪ひ去れり、兒童はそれとも知らず其「パン」を得まく欲し直ちに反顧かへりて之を求むれば亦「モー無し」と呼ぶの外なし、

一人の少女は其鳥に食餌を與へんこて籠の戸を開けり然るに其下に在る空抔に姉の姿の映寫りしを見るや何心なく戸を閉ち切らずして脇目せり、「汝の鳥は那處に在るか」「アー鳥はなし既に飛び去れり」兄は少女を慰めて曰く「予に伴ふて來るべし予は彼老樹の梢に一つの巢を發見せり、其巢の中には多くの鳥兒あり之を獲ること は失ひし一羽の代りに數多の鳥を得べし、來れ來れ」と於是て兒等は鳥に心を奪れて一心不亂こなり飢ゑたる犬が彼等に隨て來り其手より「パン」を奪ふて食ひしにも氣付かずして只管樹梢を望んで立てり、既にして其手に「パン」なきに心付て呼び曰く「モー無し」と其時兄は攀ぢて既に樹上に在りされごも鳥は皆飛去りて一羽も無し」他の兄忽ち答へて「されご予は一羽の小鳥を得たり、見よ此の帽子の下を

之れを妹に與へなば其喜は如何ならん、アー嬉れし此處に美しき覆盆子あり予は之を味はん、愛らしき小鳥よ爾は暫時其暗き所に忍び居るべし」こ、忽ち風あり帽子を吹き覆せば鳥は早くも遁れ去れり、兒は遽てゝ引き反し來るも既に及ばず唯曰「ア、小さき鳥は既に無し」こ

是に於て母こ共に此畵を視居たる小兒は言はん」母よ希くは再び此繪を私に示し玉ふこご勿れ一人も其欲する所のものを保持し得たるものなし」母曰く「我子よ今や爾は何物にても永く之を保存たんには深く意を注ひ之を大切にせざるべからざるこごを悟りしなるべし、爾は爾の熱心の爲めに自らを失ふ勿れ、若し一時に一事を成さんこ欲せば嚴重に短規を守らざるべからず、少兒は渴を濕す水なきに失望して「パン」を忘れ少女は不注意に由りて其秘藏せる鳥を遁せり。少兒は小鳥を其巢より捕へ來て之を籠中に幽するの權利を有せず、見よ彼等は其活力こ勇氣こに依り自己の自由を求め得て蒼空高く飛び去れり。空望に心を奪はれし小兒は犬の爲めに其「パン」を奪はれ。小妹を喜ばせんこ欲せし折角の親切は覆盆子の誘惑に負

けて水泡に歸せり」「子は忽ち叫て曰く」「母よ飛び去りつゝある小鳥を再び私に眺めさせ玉へ」

● 味の歌 （第十八、十九ページ）

此遊戯と短歌とは目に見ゆる物體よりも更に吾々の生命に密接せるものに關するを以て亦起臥の遊戯の如く別に圖解を附せざるなり、

夫の愛に富める母が其兒と遊び戯れつゝ人生最要のものを遊びの中に寓しながら其愛兒に果物など與へて愉快らしく手眞似しつゝ「余にも之れを食べさせよ」爾その林檎を食べて見よ、實に甘味なり」など戯るゝを見るもの誰か一種の快感を催さゞらん、

來れ小供よこゝに來て、　白き覆盆子を手に取り見よ、
汝はたのしく覆盆子をかみ、　多くたべんと口を開く、
猶酸き甘きが交れごも、　食ふべき時は今なりと、
汝が心には思ふらん、

味官遲鈍にして食味の佳否を辨ずる能はざるものゝ不幸は大なるかな、されば兒童の教育に於て五官の習練程大切なるものは無かるべしと雖ども其中特に味官

を習練して其官能を活潑鋭敏ならしむるを以て最も肝要なる事と爲すなり、況してや其習練の如何は頗る其心靈の發達に影響する所あるおや斯る次第なれば如何にして味官の習練をなすべきかは卿の宜しく心を留て考ふ可き所なるべし

凡そ物には種々様々の性質備具りて或は人を利益し或は人を毒害する事ありて雖ども其性質は深く其中に潜伏して一見吾人の心に呈露するものに非るなり、然るに五官なるものあり能く其潜伏せる内性を顯露して之を我が心識に活如たらしむ是に於てか吾人は預め物の利害を察して之が防備を爲すを得るなり是實に感官の妙用にして其深意の存する所なり即ち味官の如き夙に食物中に在る一種不可思議の無形物即ち味なるもの、佳否を辨じ其未だ咽喉を下りて胃腑に達し身體を傷はざるに先ち既に其身體に關する利害如何を察知し有毒の物を棄てゝ專ら滋養ある物を取らしむるを得、蓋し五官の錬磨に由りて能く有害物を避け專ら健康上に缺く可らざる物品を撰擇するの力を得るは實に造化の妙用なりとす、彼の毒草毒菓が多く其形色と臭氣とを以て其内性を發表する様を見れば一層造

化の智と愛とに驚かざるを得ず、見よ有害の植物は多く陰暗幽鬱にして皺縮したる様を呈するを、たとへば蛇覆盆子の實は圓く滑かに且つ美なれども其葉と果との色は自ら其毒性を顯すが如し。會々外形よく内質を隱蔽して一見其毒の有無を識別し難き場合には又一種嫌嘔の臭氣ありて容易く其有毒なる性質を知らしむることあるなり。又通常滋養となる可きものも過食して健康を害すべき時は味官は次第に飽厭の氣を生じ遂に之を嫌ふに至らしむるなり、たとへば多く砂糖を食するときの如し、

五官の習練は啻に此の如く體育上に必要なるのみならず又心靈を發達せしめ意志の作用を強むるに最も缺く可らざるものなり。何となれば物體の性質は悉く其形狀大小より香味色聲等に至る千種萬別の關係と比較とに由りて知り得らるべきものにして、五官は即ち之を知るの中保なればなり、若し此の中保にして遲鈍なる時は何に由りてか外界の事物に接して能く精確なる印象を得、正しき觀念を造くることを得んや、夫の「語れよさらば汝の何人なるかを告げん」との俚言の如く物

と其性質とは唯五官の語る所に由りてのみ之を識るを得るなり、故に五官は人を適當なる心靈上の智識に導く案内者と謂ふを得可し、母たるもの豈兒童の味官を習練するここに意を用ゐずして可ならんや、

既に味歌の題詞に於て說明せんと勉たる如く感官の習練は森羅萬象の類別比例及び其相互の影響特に其人類に及す影響を認識するに大切なるのみならず又其身軀修養の度及び各物成熟の程度を確認するに於て一層大切なり。今若し人類生活の現象及び其關係を明白に確實に更に又廣く觀察し來る時は物の未だ成熟せざるに之を濫用するここは猶未熟の果物の消化機を害するが如く、個人にも社會にも共に大害の根基たるなり、さらば一家の母たる卿は其家族と子孫との幸福を計らんと欲せば須く其兒の活力新に動き事物を用ひ始るに當り早くも未熟より成熟に達する發達の初階を觀察せしむるのみならず、又凡て成熟せざる事物を用る事に付て自爲の嫌惡並に肉身的、心靈的、及社會的生活に於る此嫌惡の破壞的反動を知しめざる可らず、此の如くして始て卿は人類の最大恩人の一ことなる可き也

● 香の歌　（第十九ページ）

物體中に隱伏せる一種無形の性質を探り知らんと欲せば感官中特に味官の習練に注意せざる可からざるここは前章に於て既に其概略を說明せり。此章にては專ら味官に密接して常に其作用を佐け互に其足らざる所を補ひ以て一層完全に物性を顯露し容易く害あるものを避け益あるものを取らしむる嗅官の作用及び其習練の必要を語るべし、

偖身心の關係は極めて親密なるものにして心靈の發達の肉體の發達に伴ふここは疑ふ可らざる事實なり身的存在は何處に終りて而して心的存在は那處に起るか其限界を知るは容易に非ず。身的作用の心的作用に、生活的作用に、生活的作用の智力的作用に、本能的作用の道德的作用に何時しか混溶し去るは宛かも水天相接して其際を知る可らざるが如し、是を以て互に相待ち相助けて完全なる作用をなす所の嗅味兩官の習練は益々智力と德性の開發に缺く可らざるを感ずるなり。何ごならば活潑なる智力は健康なる身體に存し高尙なる德性は本能性の發達に伴ふて進步する

ものなればなり視味兩官を用ひて尙判定するを得ざる物も嗅官の助けを借る時は容易に識別し得ることは已に論ぜり、健康に害あるものは啻に其形色を以て内性を顯すのみならず、亦一種嫌嘔の臭氣によりて其毒質を知らしむるなり、啻に色に於て味に於て臭氣に於て然るのみならず聽官亦其不諧の調音に於て金屬の性質を知らしむるなり、されば益々感官習練の非常に大切なるを知るべし。加之各物其物自體には營養に資す可き良性質を有するも之を用ゆる過度なるに由て反て害毒となる事あり彼馥郁たる清香は鬱氣を散じ心意を爽快ならしむるものにて床上一片の梅花は能く幾多の來客に快感を與ふるも花香あまりに鬱積して其室に滿つること度に過ぐる時は反て嫌嘔の氣味を催し大に健康の害となるものなり。過度は常に厭嫌を生じ厭嫌は健康の爲め過度の避くべきを忠告するものなり。ア、母よ卿は香味に關する遊戲若くは物語の際に能く此事を兒童に敎へざる可からず。今迄多くの香氣馥郁たる美花を聚め餘念なく遊び居りたる小兒は忽然呼て曰く「母よ余は頭痛を感ず」と卿は驚て「何を爲して遊びしか」と問へば兒は「たゞ美麗なる良き香の花を多く折り集めて居りしのみ」と答ん、是の如き時は卿は敎へて曰ふべし「アー夫れこそ頭痛の原因なれ、かく多くの香氣強き花を集むる時は其花香室内に鬱積し鼻を徹して頭腦を刺激するが爲め遂に頭痛を起すに至りしなり、たゞ健康を助くべきものも若し其適度を過す時は反て大害を釀すの恐れありさらば常に鼻口の慾を愼まざる可らず。且つ自己の慾を滿足せしめん爲め多量の美花を自室に集め他人をして之を得る事能はざらしむるは是れ私慾にあらずや」と小兒は曰はん「然し母上よ、卿が私を愛し玉ふ如く植物及花も私を愛する樣に思はるゝ」と、

暗きを出でゝ明に入る、　道をば彼等ぞ得させける、
笑顏やさしく咲き匂ふ、　花は心をなぐさめて、
わが耳近くさゝやきつゝ、　如何に其身の年々に、
生活するかを語るなり、　汝が身の持てる美しき、
平和は我にも分たれて、　我が心をぞ淸めける、

危險に遠く我を置け、
汝が名はすべて皆知れり、
汝は姿と色にのみ、
「御身は疲れざるべし」と、
其詞こそ世にたぐひ、
夏の空にぞ滿ちわたる、
教へよ其花いざ我に、
花の中には光ある、
美しき花よ美しき花よ、
高きに向ひて猶遠く、
いと親切に永久なる、
あはれ愛もて離れ得ぬ、
神に我身を導くも、

誑惑來らば戒めよ、
汝が方言を教へてよ、
思ふ心をあらはして、
我に親しく語るなり、
まれなる香の如くにて、
誠を愛する其事を、
かく美しく咲きにほふ、
精神こもれるもの多し、
汝は弱りし我を慰め、
窮めん事物を教ふれば、
我守人と賴むべし、
汝と我とを作りたる、
唯是れ汝が身のめぐみなり。

汝が一枝を折らしめよ、
樂しましむべき其爲に、
しるしに贈らん其爲に、
死さへ汝が身のかうばしき、
汝が身はこゝを去とても、
慕ふ我をぞ慰むる、
母が面影の記臆なれ、
其子を惠み得しならば、
あゝ汝が心に我記臆、
なほいつまでも親切と、
戒めあたへよ我ために、
我身の學課よ教訓よ、
入るべき門を明けおきぬ、

我最愛なる父母を、
我感恩と調和との、
世に恐ろしき刈人なる、
呼吸はこゝむる能ふまじ、
香は猶空をさまよひて、
そのなつかしき姿こそ、
母も其そば離れずに、
死すとも嬉しかるべきに、
こゝむる事は我ぞ知る、
愛と誠を盡すべき、
是こそ汝より受け得たる。
なほ〳〵語れ我耳は、
たゞいたづらに我は又、

汝が身を手折るここはせじ、かくれしいばらに刺されつゝ、
悔まん時の、來ん故に、

●「こつと、こつと」　（第二十、二十一ページ）

腕を動かし練習する遊戯

此の遊戯は容易く實試し得らるゝものなり。圖に示せるが如く小兒の片手を取り片手を自由にして母の膝上に立たしめ其手を時計の振子の如く前後に運動せしむべし、或は左手を以てし或は右手を以てし又左足或は右足をも亦此の如く交互に振動せしむ可し、斯くして偏することなくんば全體圓滿に發達して健全なる兒こなるを得可し

育兒上經驗ある世の母親に對し更に圖面の說明を爲すは恐くは釋迦に說法の嫌を免れざる可し、蓋は育兒に關する吾人の智識は元、世の母親の周到懇切なる擧動に注意觀察して得たるものなればなり、

然れども茲に注目す可き一事あり凡そ其何種たるを問はず苟も時計と名けらるゝ可きものは常に深く兒童の注意を惹くは實に奇に非ずや。今其所以を探究して世の母親の參考に供するは亦價値なきこゝに非る可し、兒童が斯くまで時計に意を

惹かるゝは亦他の遊戯の如く深き意味の其中に蘊蓄するありて兒童に發達す可き肝要なる將來の性質を預言するものに非るを得んや。要するに兒童が時計を喜ぶ所以のもの其理由一にして足らざる可し、嘗て小學校に通ひし頃柱頭の時計の振子が分秒を違へず不斷あちらこちらへ動くを見て運動法則の一定不變なること其振動の韻律に協ふことを感じ。又時計の振子が「コツチ、コツチ」と調子よく迅速に響く音を聞きしこと大に吾人の好奇心を刺激せしを思ふときは是等は必ず時計が兒童の注意を惹く一二の原因たらざるを得ず。卿は言はん時計の回旋機械の蠕動及び其内部構造の精妙こそ深く兒童の注意を促すものならめと、亦一理ある說なり、然ども是畢竟幾多の原因中の一に過ぎざるのみ。若し兒童が時計の遊戯を好むの理由以上の如きに止らしめば何故彼の日時計の如き物を作るを好むか、日時計に於ては日晷が音も聲もなく殆ど感知す可らざる程徐々に移動するを見の外別に運動の見べき無に非ずや。故に吾人は兒童が時計を好む第一の原因は兒童の心中に深く潛んで未だ醒め動かざる一種の性即ち時を重んずるの天性に根基

するを確信して疑はざるなり。是說や啻に兒童及び其他の人々に損害を與へざるのみならず反て大に益する所あるを知る、何となれば凡ての人皆時を利用するの必要を感ずればなり。されば嬰兒の搖籃に在るの時より善く時を守り時を用ゆるの習慣を養成する程人生に大切なることはなかる可し。兒童既に好で時計の遊びをなすに至らば善く此嗜好即ち時計に注意するの心を利用して時間を貴重するの天性を喚起し時間に就て正確なる觀念を與へ之を善用するの習性を成さしむるは最も緊要のことなりとす、

若しも兒童が此小さき繪畫を示されんことを乞ふときは、卿は直ちに言ふ可し「此小さき猫兒は何をなして、居るか、傍の見る眼にさへ快き程自ら其身を洗ひ淨め居るに非ずや彼は今しも其友を訪ふ可き時刻の來らんとするを知りたる樣子なり」と。斯くて卿は尙ほ言ふ可し「兒よ來れ今將に來客あらんとす、宜しく沐浴して之を待つべし父の歸り玉ふ時其身の潔淨なるを譽められゝ樣に爲すべし美麗の花や奇麗の鳩が澤山來れり。